

松江市文化財調査報告書 第131集

斐伊川水道建設事業 8 工区受水地送水管路布設工事に伴う

石流遺跡発掘調査報告書

2010年2月

松江市教育委員会
財団法人 松江市教育文化振興事業団

松江市文化財調査報告書 第131集

斐伊川水道建設事業 8 工区受水地送水管路布設工事に伴う

石流遺跡発掘調査報告書

2010年2月

松江市教育委員会
財団法人 松江市教育文化振興事業団

例 言

1. 本書は、斐伊川水道建設事業 8 工区受水地送水管路付設工事に伴う石流遺跡発掘調査報告書である。
2. 本書で報告する発掘調査は、島根県企業局から松江市教育委員会が委託を受け、財団法人松江市教育文化振興事業団が実施した。
3. 調査地は、島根県松江市法吉町371-6、372-3、898-2に所在する。
4. 現地調査の期間は、平成21年4月10日から平成21年6月24日までである。
5. 開発面積及び調査面積は、以下のとおりである。

開発面積	2179.84㎡
調査面積	470㎡
6. 調査組織
〈調査主体者〉松江市教育委員会 教育長 福島 律子
事務局 文化財課 課長 吉岡 弘行
“ “ 調査係長 飯塚 康行
“ “ 主幹（現場指導担当者） 赤澤 秀則
“ “ 主任（事務担当者） 後藤 哲男
〈調査指導〉島根県教育委員会 文化財課企画員 池淵 俊一
独立大学法人島根大学総合理工学部 准教授 酒井 哲弥
〈実施者〉財団法人松江市教育文化振興事業団 理事長 松浦 正敬
埋蔵文化財課 課長 廣江 眞二
“ “ 課長補佐 錦織 慶樹
“ “ 主任（事務担当者） 門脇 誠也
〈調査担当者〉 “ 主任 江川 幸子
〈調査補助員〉 “ 嘱託員 福光 龍治
7. 調査に参加した作業員は下記のとおりである。

（現地作業員）細田信子、細田勇治、吉岡永子、秦岡富士子、角田ミヤ子、吉岡啓三郎
今村正人、今村邦子、今村ひろ子、松崎政子、原英誉

（遺物整理員）田中富士美
8. 調査にあたっては、松崎利治氏、青戸商店 代表取締役 青戸伸一氏の協力をいただいた。
9. 本書に掲載した遺物の実測・観察は、福光龍治、田中富士美の協力を得て江川が行った。
10. 遺物の復元には瀬川恭子、挿図浄書には北島和子の協力を得た。
11. 本書の遺物撮影は、江川がおこなった。
12. 本書の執筆・編集は、第1章は松江市教育委員会文化財課の協力を得て、第2章を福光が第3・4章を江川がおこなった。
13. 本書における方位は公共座標北を示し、座標値は世界測地系に準拠した公共座標系第Ⅲ系の値である。また、レベル値は海拔標高を示す。
14. 本文、図中では、SB：掘立柱建物跡 SA：杭列跡 P：小土坑 SK：土坑 SD：溝 SX：性格不明遺構と略称した。（小文字の場合は、その図面内だけで通用する名称とする。）
15. 出土遺物、実測図および写真などの資料は、松江市教育委員会において保管している。

本文目次

第1章 調査に至る経緯	1
第2章 位置と歴史的環境	2
第3章 調査の記録	
第1節 調査方法と調査の経過	4
第2節 調査結果	9
第4章 結　　語	32
遺物観察表	33
写真図版	
報告書抄録	

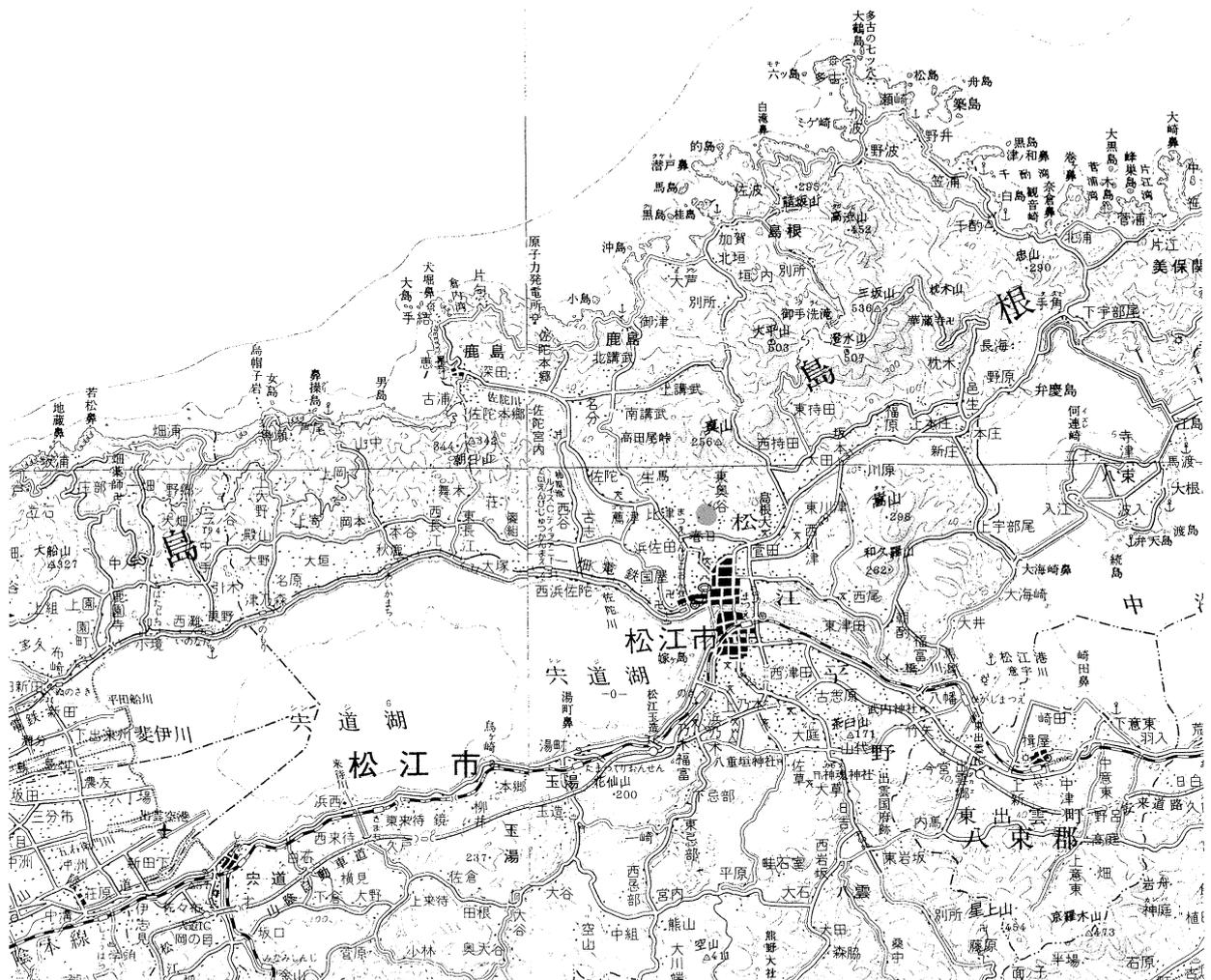


第1図 松江市位置図

挿 図 目 次

第1図	松江市位置図	
第2図	石流遺跡位置図	
第3図	開発予定地と石流遺跡の位置関係 (1/1000)	1
第4図	周辺の地形及び遺跡分布図 (1/25000)	3
第5図	調査前地形測量図と調査成果図 (1/200)	5~6
第6図	調査地土層図 (1/120)	7~8
第7図	南東端部平坦面ピット群 (1/60)	10
第8図	SD01と周辺の遺構 (1/60)	11
第9図	SD01と周辺の遺物出土状況 (1/40)	11
第10図	SD01の下層の遺構 (1/60)	12
第11図	南東端丘陵出土遺物実測図 (1/4)	12
第12図	丘陵斜面の地すべり跡土層図 (1/80)	13
第13図	SD03と周辺の遺構 (1/60)	14
第14図	SD03遺物出土状況 (1/40)	14
第15図	旧河道01と地すべり跡Ⅱ (1/80)	15
第16図	SX02遺構図 (1/60)	16
第17図	SX02遺物出土状況 (1/40)	17
第18図	SX02出土遺物実測図 (1/4)	17
第19図	SX03の土層と遺物出土状況 (1/60)	18
第20図	SX03周辺出土遺物実測図 (1/4)	18
第21図	合わせ口の土師質土器(皿)出土状況 (1/10)	18
第22図	土師質土器実測図 (1/4)	18
第23図	地すべり層上面の遺構と下面の遺構 (1/60)	19
第24図	杭列 (1/60)	20
第25図	地すべり層と下面の遺構 (1/60)	21
第26図	SA01 (1/60)	22
第27図	SA02 (1/60)	22
第28図	掘立柱建物跡SB01 (1/60)	23
第29図	SK03 (1/40)	24
第30図	2区の遺構内出土遺物実測図 (1/4)	24
第31図	段01と加工段01と周辺の遺構 (1/60)	25
第32図	段01周辺の遺物出土状況 (1/40)	26
第33図	段01床面出土土器実測図 (1/4)	26
第34図	加工段01遺物出土状況 (1/40)	26
第35図	加工段01出土遺物実測図 (1/4)	26

第36図	SD04・05と周辺の遺構 (1/60)	27
第37図	SD04遺物出土状況 (1/40)	28
第38図	SD04出土遺物実測図 (1/4)	28
第39図	SD05遺物出土状況 (1/40)	28
第40図	SD04・05北方の遺物出土状況 (1/40)	28
第41図	SD04・05周辺の遺構面出土遺物実測図 (1/4)	29
第42図	段03～SD05の遺物包含層出土遺物実測図 (1/4)	29
第43図	SD06・07と周辺の遺構 (1/60)	30
第44図	SK05 (1/20)	30
第45図	SK05出土遺物実測図 (1/4)	30
第46図	SD06・07周辺遺物包含層出土遺物実測図 (1/4)	31



第2図 石流遺跡位置図

第36図	SD04・05と周辺の遺構 (1/60)	27
第37図	SD04遺物出土状況 (1/40)	28
第38図	SD04出土遺物実測図 (1/4)	28
第39図	SD05遺物出土状況 (1/40)	28
第40図	SD04・05北方の遺物出土状況 (1/40)	28
第41図	SD04・05周辺の遺構面出土遺物実測図 (1/4)	29
第42図	段03～SD05の遺物包含層出土遺物実測図 (1/4)	29
第43図	SD06・07と周辺の遺構 (1/60)	30
第44図	SK05 (1/20)	30
第45図	SK05出土遺物実測図 (1/4)	30
第46図	SD06・07周辺遺物包含層出土遺物実測図 (1/4)	31



第2図 石流遺跡位置図

図 版 目 次

- 図版 1 (上) 石流遺跡調査前遠景 (西から)
(下) 石流遺跡調査前近景 (南西から)
- 図版 2 (上) 1区南東端平坦面遺構 (部分)
(下) SD01検出状況
- 図版 3 (上) 1区南東端平坦面遺構
(下) 高坏出土状況
- 図版 4 (上) 地すべり層Ⅱ検出状況
(下) SD03と周辺の遺構
- 図版 5 (上) SX02遺物出土状況
(下) SX02の須恵器出土状況
- 図版 6 (上) SX02・SX03の完掘状況
(下) SX02南北セクション
- 図版 7 (上) SX02と地すべりⅡの関係
(下) SX02と地すべりⅡの関係
- 図版 8 (上) 地すべり層下の遺構面
(下) 天目茶碗出土状況
- 図版 9 (上) 2区ピット群 (西から)
(下) 2区ピット群 (東から)
- 図版10 (上) 加工段01遺物出土状況
(下) 加工段01と周辺の遺構完掘状況
- 図版11 (上) SD05・06と周辺の遺構
(下) SK05遺物出土状況
- 図版12 (上) 3区北西端の遺構
(下) 合わせ口の土師質土器 (皿) 出土状況
- 図版13 (上) 南壁セクション
(下) 石流遺跡完掘状況 (南西から)
- 図版14 出土遺物
- 図版15 出土遺物
- 図版16 出土遺物

第1章 調査に至る経緯

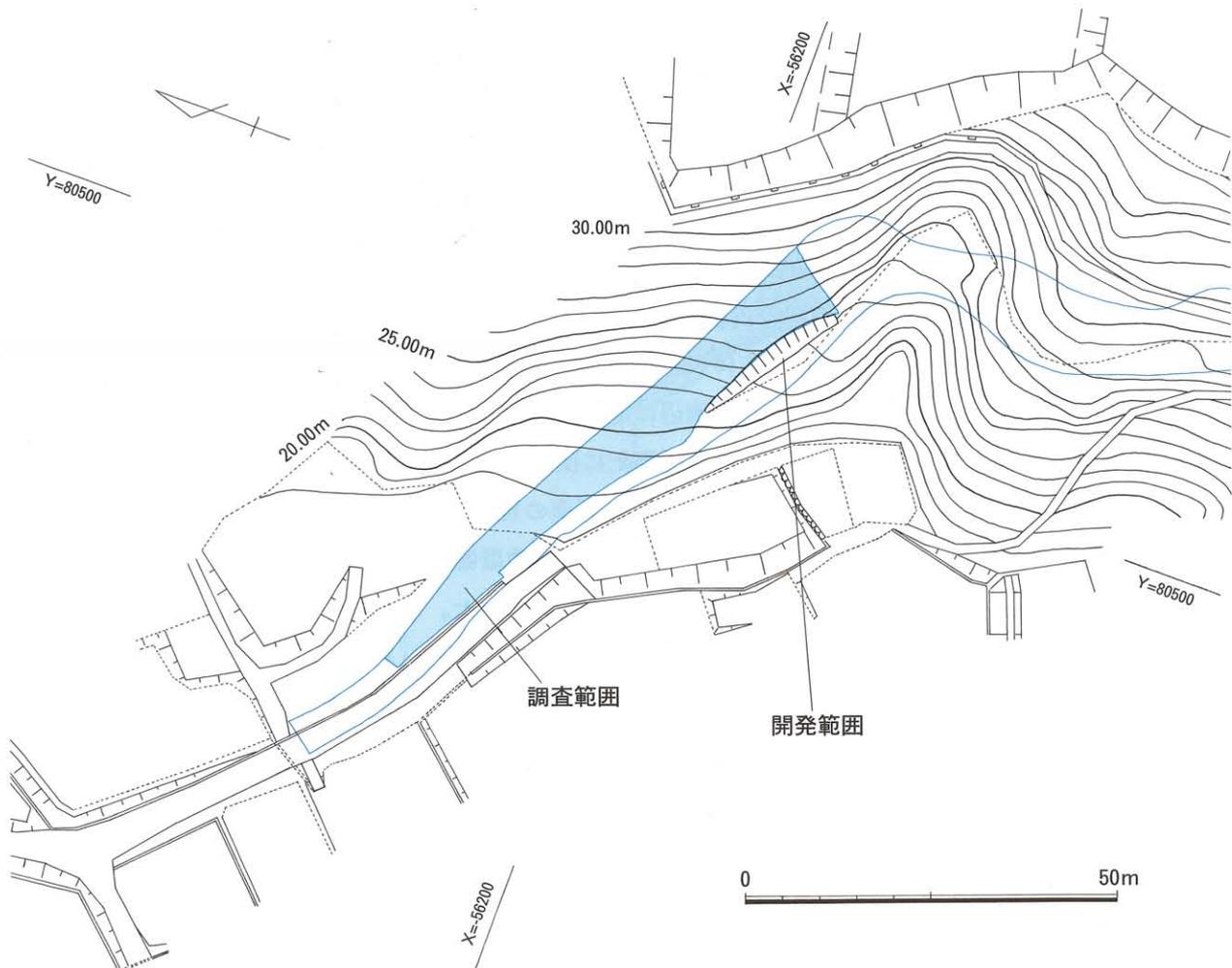
島根県によって松江市法吉町に計画された。斐伊川水道建設事業に伴う送水管路の布設工事は、東部地区の慢性的な水不足を解消し、良質で安定した水道水を確保するため、尾原ダム建設に併せ、斐伊川を水源として3市1町（松江市、出雲市、雲南市、東出雲町）へ用水の供給をするものであり、配水池に向けて送水管を布設し、併せてその上部を管理道路とするものである。

該当地は法吉町の丘陵裾にあたり、東側の丘陵地は既に住宅地として開発され、消滅しているが、「折廻古墳群」や「ひのさん山横穴群」などの古墳時代の遺跡が存在していたことが知られている場所であった。

平成20年10月8日、島根県企業局から松江市教育委員会文化財課に対して分布調査依頼書が提出された。松江市教育委員会は平成20年10月17日現地踏査を行った後、平成20年10月21日と10月29～30日にかけて試掘調査を行った。

試掘調査は4本のトレンチを設定し実施した。調査の結果、3本のトレンチから遺構、遺物が検出されたことから「石流遺跡」と命名し、文化財保護法上の手続きをとった。

この後、遺跡保護のための協議がなされたが、計画変更は困難との結論に達し、平成21年度に発掘調査を実施することとなった。



第3図 開発予定地と石流遺跡の位置関係（1/1000）

第2章 位置と環境

石流遺跡（1）は、島根県松江市法吉町371-6・372-3・898-2に所在する。

美保関から大平山に続く松江北山山地の南側には、東西に連なる山塊から多くの支脈が伸びている。遺跡地は、その支脈のうち白鹿山から谷を挟み、丘陵づたいにつながっている淞北台団地の西部山裾に位置している。

遺跡地の西側には、平野部が広がって田畑が営まれており、その中を近年ゴルフ練習場の開発も行われた。さらに、その先には閑静な住宅街も広がっている。南側には、狭い平地の向こうにすぐ低い山が迫っている。北側から東側にかけては、淞北台団地のアパート群を見上げることができる。この淞北台に続く緩斜面が今回の調査地であり、その中には周辺住民の通用路としての役割を果たしてきた道もあった。

この周辺には遺跡が多く、後期旧石器時代の遺跡としては、白鹿谷遺跡（5）で玉髓製搔器が、大門遺跡（20）で安山岩製の尖頭器が発見されている。

縄文時代の遺跡としては、法吉遺跡（18）があり、縄文土器が出土している。また、縄文時代の流路でドングリの集積が検出されている。弥生前期と中期の土器、その他にも土師器片・黒曜石・石器も見つかっている。

弥生時代の遺跡としては、前遺跡の他に、田中谷遺跡（10）から弥生土器や建物跡が見つかっている。また、下がり松遺跡（11）・春日遺跡（26）からは弥生土器片が出土している。

古墳時代の遺跡としては、周辺で多くの古墳や横穴墓が発見されている。前期としては、2基が確認されている、かいつき山古墳群（33）があり、前期から中期にかけての21基からなる月廻古墳群（21）では、箱式石棺や礫床を伴う木棺が使用され、竜虎鏡なども出土している。塚山古墳（15）は、辺33mの中期の造り出し付方墳で仿製六神頭鏡・鉄製武具・滑石製白玉・ガラス製小玉・円筒埴輪などの副葬品も発見されている。後期の古墳は最も多く、伝宇牟加比売命御陵古墳（13）は低丘陵尾根部に築かれた一辺16mの方墳で内部主体には石囲いの木棺墓をもっていた。副葬品として鉄製刀子1口・鉄製長頸鏃15本が出土した。また、南辺にあった幅5m・長さ2mの造り出しの底部には3本の円筒埴輪が立てられ、造り出し上からは墓前祭祀に使われたとみられる丹塗り土師器や須恵器が数多く発見されている。また、岡田薬師古墳（3）は石室の規模が全長3.3m以上、奥壁部の幅1.1m、高さ1.04mで、須恵器・玉などの副葬品が出土している。他にも、水酌崎横穴墓群（30）・ひゃくだ横穴墓（29）・比津ヶ崎横穴墓などの横穴墓も多数作られていた。久傳遺跡（37）では、4箇所の加工段と6棟の掘立柱建物跡が検出され、須恵器・土師器が出土している。

奈良・平安時代の遺跡としては、下がり松遺跡（11）で6棟の掘立柱建物跡・加工段・溝状遺構などが検出され、出土した大量の遺物の中には墨書土器や転用硯も含まれている。久米遺跡（22）では、須恵器や土師器の生活用品が多数出土している。

中世の遺跡としては、尼子氏の勢力下において築かれた白鹿城（6）・高つぼ山城（7）・小白鹿城（4）などが知られている。この地域は、16世紀中頃から後半にかけての毛利氏との戦いの古戦場となっている。



第4図 周辺の地形及び遺跡分布図 (1/25000)

1. 石流遺跡 2. 折廻古墳群 3. 岡田薬師古墳 4. 小白鹿城 5. 白鹿谷遺跡 6. 白鹿城 7. 高つぼ山城
 8. 栗本古墳 9. 角谷古墳 10. 田中谷遺跡 11. 下がり松遺跡 12. 新宮古墳 13. 伝宇牟加比売命御陵古墳
 14. 田中谷古墳 15. 塚山古墳 16. 久米古墳群 17. 唐梅古墳群 18. 法吉遺跡 19. 東生馬遺跡 20. 大門遺跡
 21. 月廻古墳群 22. 久米遺跡 23. 久米A遺跡 24. 久米B遺跡 25. 比津ヶ崎横穴墓 26. 春日遺跡
 27. 法吉小裏山横穴墓群 28. 摩利支天横穴墓群 29. ひゃくだ横穴墓 30. 水酌崎横穴墓群 31. 元井出遺跡
 32. 半田池条里制遺跡 33. かいつき山古墳群 34. ゴルフ場内古墳群 35. ゴルフ場内横穴墓群
 36. 比津小丸山古墳 37. 久傳遺跡 38. 小池谷横穴墓群 39. 殿山横穴墓群 40. 石田遺跡

第3章 調査の記録

第1節 調査の方法と調査の経過

調査地は北西—南東に平面距離約80m、幅4～9mと細長く、調査面積は470㎡を測る。地形は南東の端が高く標高29.50m、北西へ行くにつれ緩やかな傾斜となり北西端は標高15.00mである。比高は14.50mを測る。

この報告書では、南東の高所と傾斜地を1区、中央の台地状地形を2区、北西の低地を3区と称して説明をおこなう（第5図）。

調査は、まず北西—南東方向で調査区全体を貫くラインを設定し、北西端から水平距離5mごとに杭を打設して調査の基準とした。その後、平板を使用して調査前地形測量図（100分の1）を作成し、掘削を開始した。

廃土は場外処分しなければならないため、標高が高い1区南東端から掘削を開始し、3区に一旦廃土を集積し、一定量に達した時点でトラックによる積み出しをおこなった。表土掘削には重機を使用した。その深さは遺物包含層より若干上方までとし、その下方については全て人力で掘削をおこなった。降雨があると山頂の住宅団地から大量の水が調査地に流入してくるため、調査区南辺には常に排水用の溝を掘り、既設水路放水口の手前には溜枡を掘って上澄み水が流れ出すよう配慮した。

1区南東端から順次掘削をおこなったところ、ピットや溝等数多くの遺構を検出した。特に、調査地の中央から北西にかけては密度の高い遺構群を検出した。しかし、一方では理解しがたい遺構にも直面した。自然堆積では考えられない土層、加工段のようであるが南側半分の地山の色が全く違って不整形な形状となっている遺構などである。これらは5月28日、島根大学理工学部の酒井哲弥先生の調査指導により、地すべり跡と判明したのだが、2区の遺構面は大規模な地すべり土の下から検出されたため、場所によっては深さ2m近くある地すべり土を除去しなくてはならなかった。

上記のようにして遺構、遺物を検出した後、遺構は縮尺20分の1、遺物出土状況は縮尺10分の1で図面を作成し、写真撮影をおこなった。同時に北壁と南壁の土層図を縮尺20分の1で作成し、写真撮影をおこなった。最後に、平板を使用して調査終了後の地形測量図を縮尺100分の1で作成し、写真撮影をおこなった。

6月24日、最終の調査指導を受けて現地調査を終了した。

第2節 調査結果

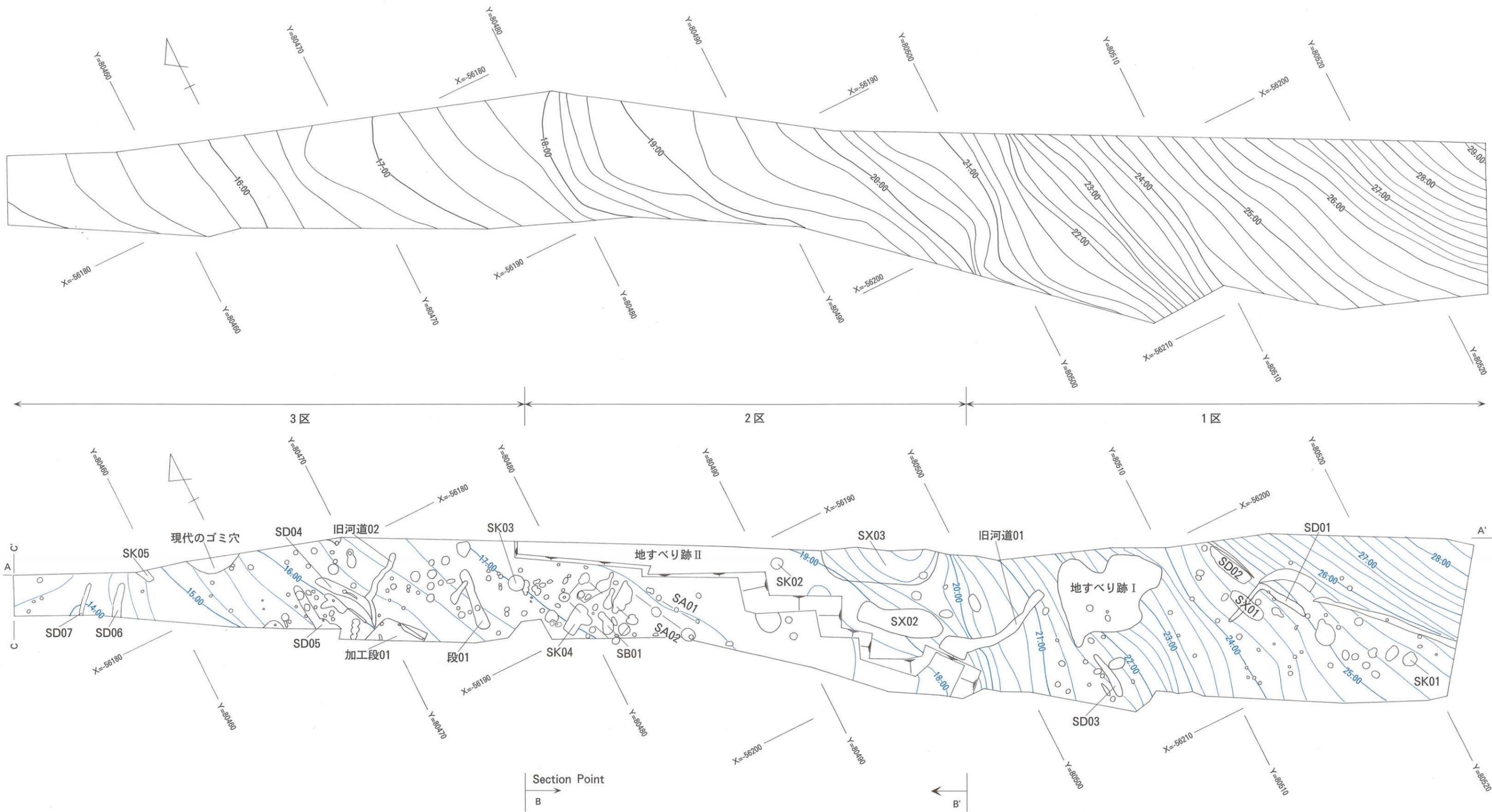
南東端の高い場所1区から2、3区の順に調査結果について記す。

【1区】

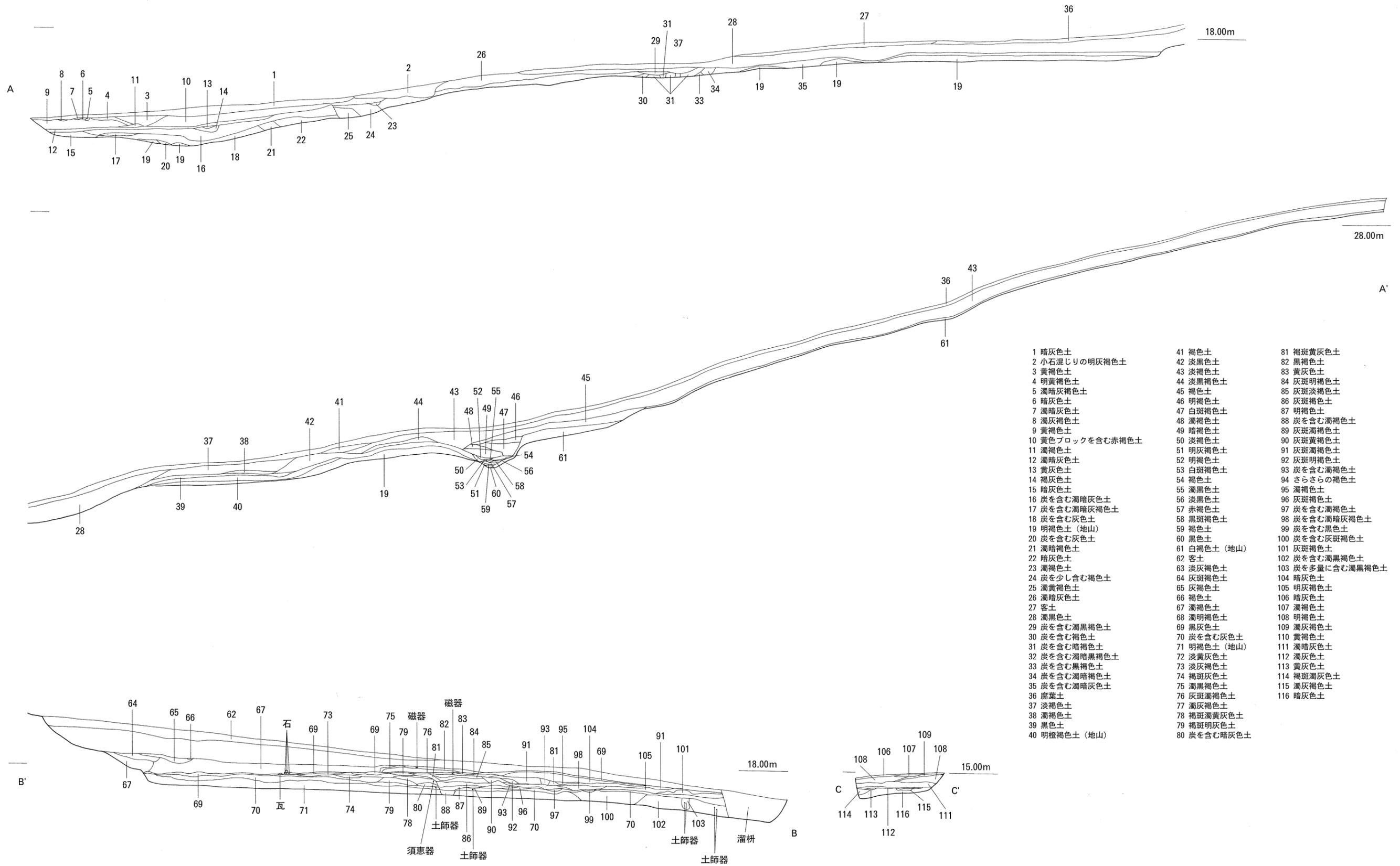
①南東端部平坦面ピット群（第7図）

東の角が調査地内の最高所で標高29mを測る。下方にむけて急傾斜の斜面となっているが、標高25.5m付近では傾斜が緩やかになり、南面した平坦面が広がっている。

山裾の地山が若干カットされて平坦面が造られており、山際には一部浅い溝が掘られていた。溝は



第5図 調査前地形測量図と調査成果図 (1/200)



- | | | |
|------------------|--------------|------------------|
| 1 暗灰色土 | 41 褐色土 | 81 褐斑黄灰色土 |
| 2 小石混じりの明灰褐色土 | 42 淡黒色土 | 82 黒褐色土 |
| 3 黄褐色土 | 43 淡褐色土 | 83 黄灰色土 |
| 4 明黄褐色土 | 44 淡黒褐色土 | 84 灰斑明褐色土 |
| 5 濁暗灰褐色土 | 45 褐色土 | 85 灰斑淡褐色土 |
| 6 暗灰色土 | 46 明褐色土 | 86 灰斑褐色土 |
| 7 濁暗灰色土 | 47 白斑褐色土 | 87 明褐色土 |
| 8 濁褐色土 | 48 濁褐色土 | 88 炭を含む濁褐色土 |
| 9 黄褐色土 | 49 暗褐色土 | 89 灰斑濁褐色土 |
| 10 黄色ブロックを含む赤褐色土 | 50 淡褐色土 | 90 灰斑黄褐色土 |
| 11 濁褐色土 | 51 明灰褐色土 | 91 灰斑濁褐色土 |
| 12 濁暗灰色土 | 52 明褐色土 | 92 灰斑明褐色土 |
| 13 黄灰色土 | 53 白斑褐色土 | 93 炭を含む濁褐色土 |
| 14 褐色土 | 54 褐色土 | 94 さらさらの褐色土 |
| 15 暗灰色土 | 55 濁黒色土 | 95 濁褐色土 |
| 16 炭を含む濁暗灰色土 | 56 淡黒色土 | 96 灰斑褐色土 |
| 17 炭を含む濁暗灰褐色土 | 57 赤褐色土 | 97 炭を含む濁褐色土 |
| 18 炭を含む灰色土 | 58 黒斑褐色土 | 98 炭を含む濁暗灰褐色土 |
| 19 明褐色土 (地山) | 59 褐色土 | 99 炭を含む黒色土 |
| 20 炭を含む灰色土 | 60 黒色土 | 100 炭を含む灰斑褐色土 |
| 21 濁暗褐色土 | 61 白褐色土 (地山) | 101 灰斑褐色土 |
| 22 暗灰色土 | 62 客土 | 102 炭を含む濁黒褐色土 |
| 23 濁褐色土 | 63 淡灰褐色土 | 103 炭を多量に含む濁黒褐色土 |
| 24 炭を少し含む褐色土 | 64 灰斑褐色土 | 104 暗灰色土 |
| 25 濁黄褐色土 | 65 灰褐色土 | 105 明灰褐色土 |
| 26 濁暗灰色土 | 66 褐色土 | 106 暗灰色土 |
| 27 客土 | 67 濁褐色土 | 107 濁褐色土 |
| 28 濁黒色土 | 68 濁明褐色土 | 108 明褐色土 |
| 29 炭を含む濁黒褐色土 | 69 黒灰色土 | 109 濁暗褐色土 |
| 30 炭を含む褐色土 | 70 炭を含む灰色土 | 110 黄褐色土 |
| 31 炭を含む暗褐色土 | 71 明褐色土 (地山) | 111 濁暗灰色土 |
| 32 炭を含む濁暗黒褐色土 | 72 淡黄灰色土 | 112 濁灰色土 |
| 33 炭を含む黒褐色土 | 73 淡灰褐色土 | 113 黄灰色土 |
| 34 炭を含む濁暗褐色土 | 74 褐斑灰色土 | 114 褐斑濁灰色土 |
| 35 炭を含む濁暗灰色土 | 75 濁黒褐色土 | 115 濁灰褐色土 |
| 36 腐葉土 | 76 灰斑濁褐色土 | 116 暗灰色土 |
| 37 淡褐色土 | 77 濁灰褐色土 | |
| 38 濁褐色土 | 78 褐斑濁黄灰色土 | |
| 39 黒色土 | 79 褐斑明灰色土 | |
| 40 明橙褐色土 (地山) | 80 炭を含む暗灰色土 | |

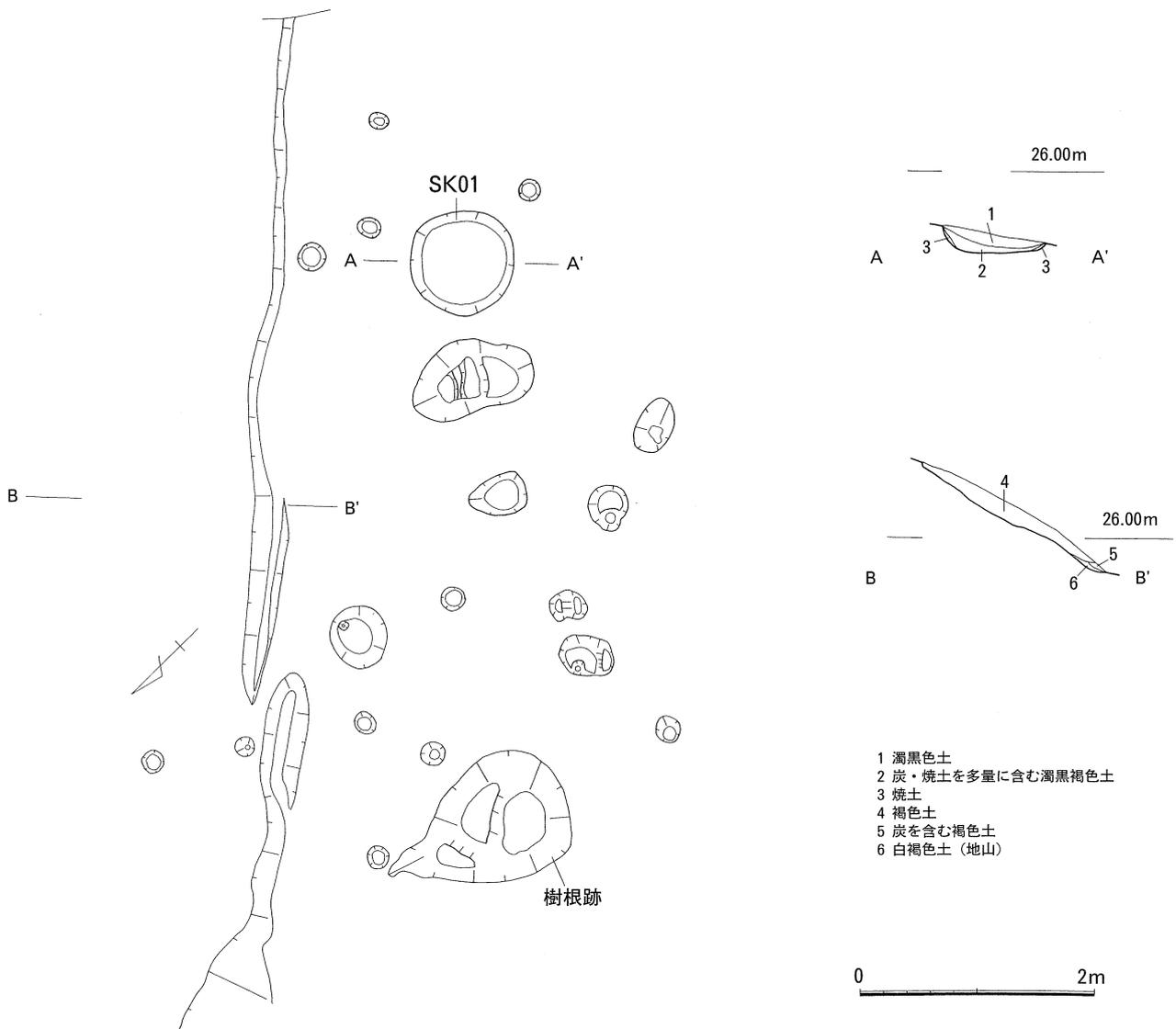
第6図 調査地土層図 (1/120)

最深部でも深さ 1 cm 程度の浅いもので、埋土は炭を含む褐色土である。(第 7 図 B-B')。溝は部分的にしか検出されなかったが、もともとは山裾に沿って延びていた可能性も考えられる。

平坦面にはピットが散在していたが、いずれも小さくて浅く、樹根跡のような不整形なものが多かった。建物跡を見つけることはできなかった。

土坑SK01は上端直径90cm、下端直径78cm、最深部での深さ19cmを測る。全面がよく焼けて赤色を呈しており、下層には炭・焼土を多量に含む濁黒褐色土が堆積していた(第 7 図 A-A')。これは家庭用の炭を焼いたいわゆる“小炭焼き”の穴で、近世以降のものと考えられる。

遺物は、急傾斜の斜面の上方から須恵器の蓋(第11図 3) 1点が出土した。現在は住宅団地と変貌している山頂付近の高所に遺跡が存在した可能性を示唆するものである。平坦面から遺物は出土しなかった。



第 7 図 南東端部平坦面ピット群 (1/60)

②溝SD01・02とその周辺（第8・9・10図）

1区南東端平坦面の西側に続く場所で、山裾をカットして造り出した平坦面とL字状の溝SD01を検出した。

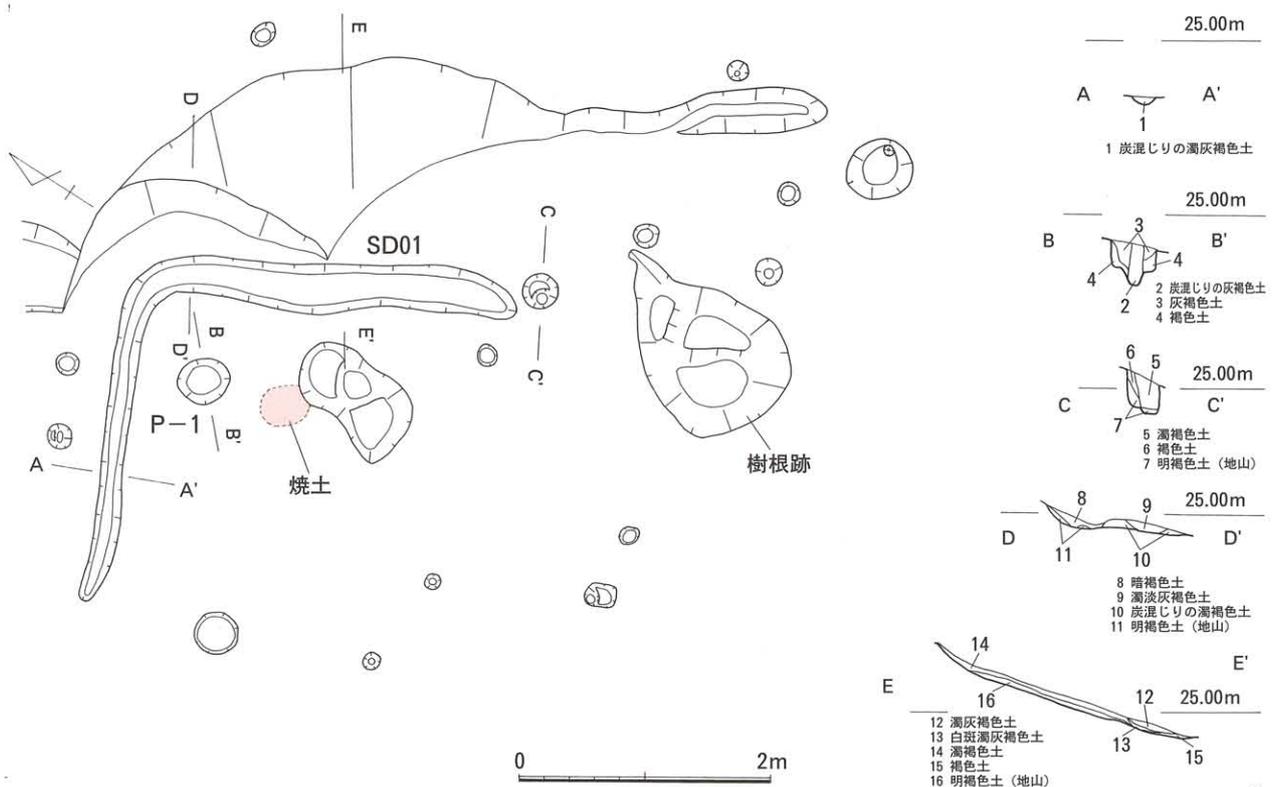
SD01の規模は、山際に平行した方向で長さ3.1m、谷方面へ2.6m、深さ4cm前後で、埋土は炭混じりの濁灰褐色土～濁淡灰褐色土である。溝の形状から建物を囲う溝と考えられるため、建物を構成するピットを探した。ピットP-1はSD01のコーナー内側に位置すること、深さが調査時で35cmあり、半裁して土層を確認したところ柱の痕跡が確認できたことから、建物を構成する柱穴の内の1つである可能性が高いと思われる。しかし、これに対応するピットを検出することができず、建物跡を検出することはできなかった。

しかし、P-1の東方40cmの地点には直径約40cm弱の円形の焼土があり、そこを中心に多量の炭が散乱していた。はっきりとした建物跡を検出することはできなかった。

SD01の底部からは土師器の小片が出土したが、器種、時期とも不明である。

ところで、このSD01の平面プランは地山面ではなく、炭を含む濁褐色土上面で検出したものである。次の段階としてこの炭を含む濁褐色土を除去したところ、SD01は全く消え去り、新たな遺構が出現した。地山から掘り込まれた、性格不明の遺構SX01である（第10図）。SX01は平面プランが楕円形で、長軸2.15m、短軸0.76m、最深部の深さ10cmを測る。床面には直径18cmのピットが2ヶ所あり、北側のピットは深さ24cm、南側のピットは深さ4cmを測る。遺構の埋土は炭混じりの濁褐色土1層である。遺物が出土していないため時期は不明である。

SD01の北方では溝SD02を検出した。長さ2.7m、幅0.7m、最深部での深さ10cm強を測るが、何の

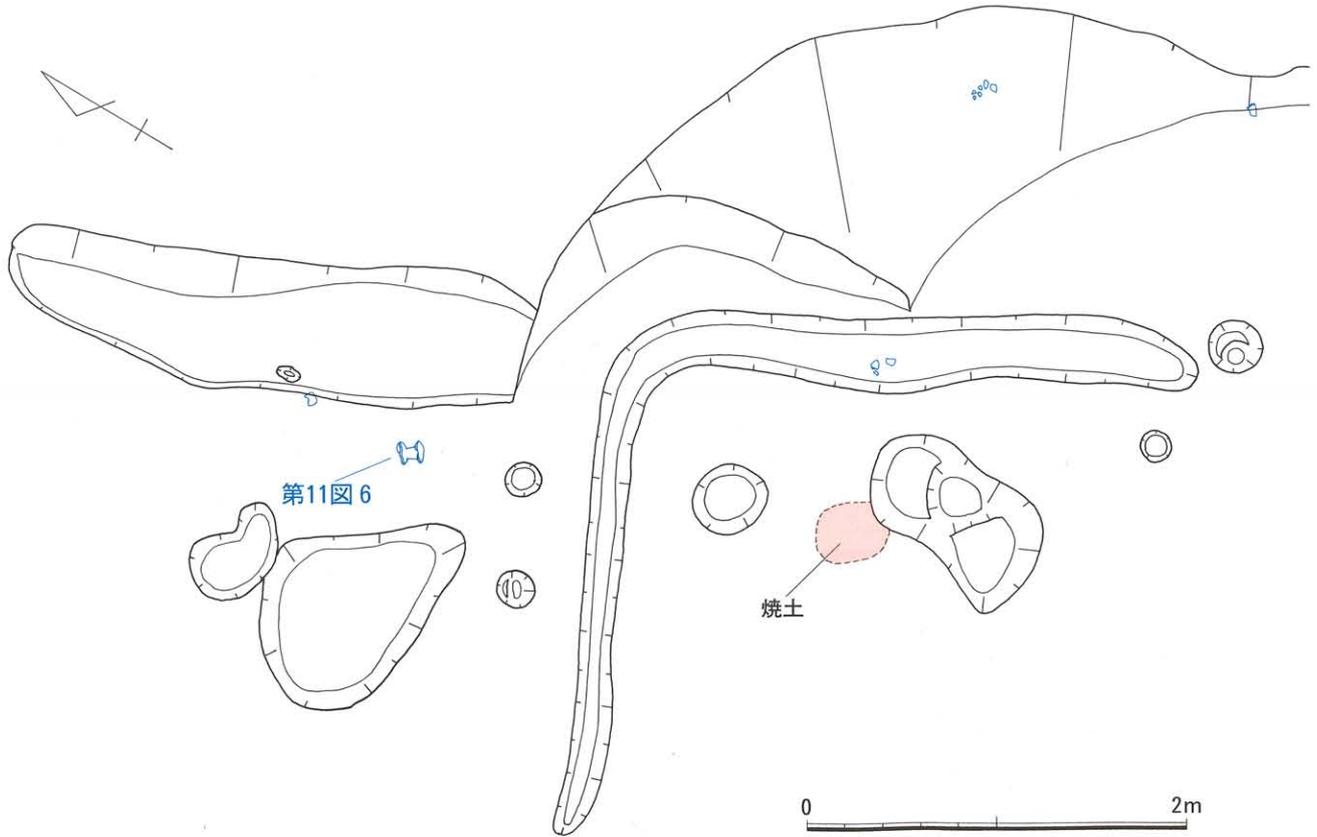


第8図 SD01と周辺の遺構 (1/60)

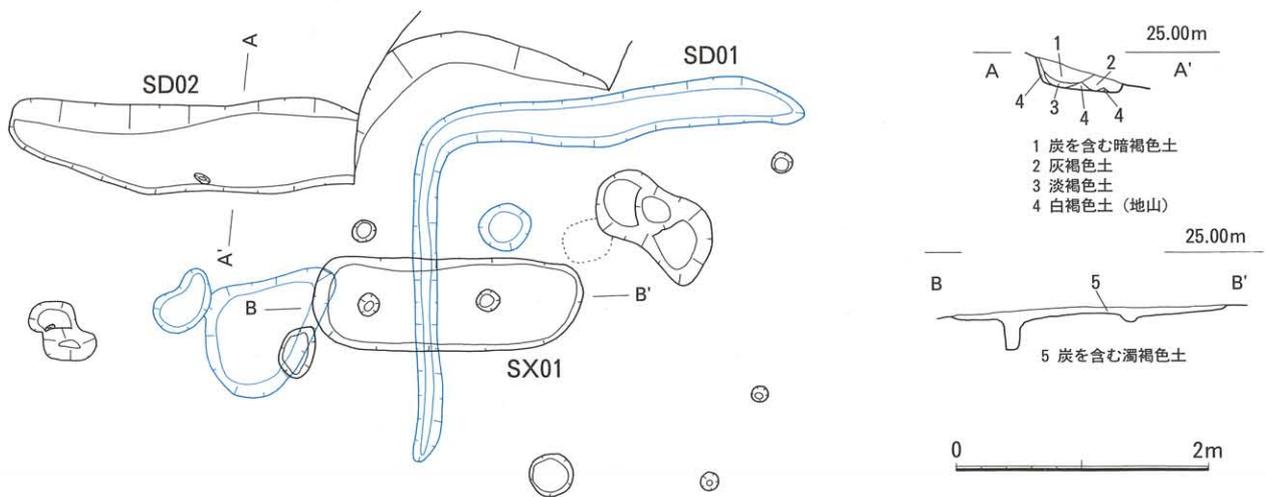
用途に掘られた溝かは不明である。SD02の肩部からは須恵器の高坏脚部（第11図9）、南方20cmの地点からは須恵器の高坏（第11図6）が出土した。

第11図はこれまで説明してきた場所から出土した遺物である。

1～3は須恵器の蓋である。1、2は天井部の調整がヘラ切り後無調整で、高広編年^{註(1)}のⅡAに分類される。1の天井部外面には先端に丸味を帯びた工具でヘラ記号「×」が描かれている。2は口径9.8cm、器高3.4cmを測る。3はかえりと摘みが付くタイプで、口径9.8cmを測る。4は3の蓋とセッ



第9図 SD01と周辺の遺物出土状況（1/40）

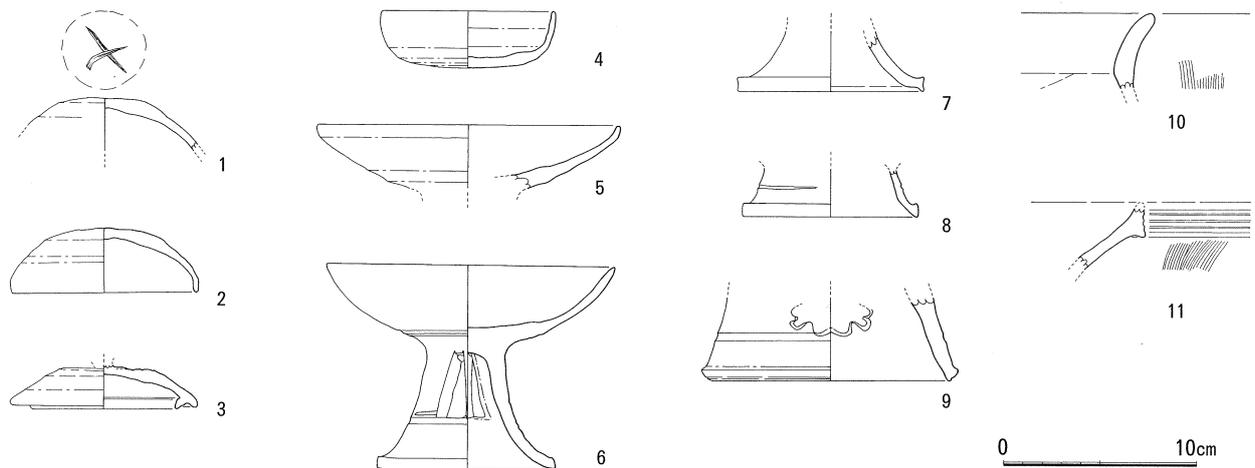


第10図 SD01の下層の遺構（1/60）

トになるタイプの坏で、ⅡBにあたる。5、6は坏部が浅いⅡBの高坏、7の高坏の脚部である。8は器種が不明の脚部で、器壁が薄い割には径が大きい。9も器種が不明の脚部である。器壁が厚く、内面上方のカーブの形態から脚の高さはこれ以上あまり高くはならないと推定される。この脚部は異形の透かしが特徴的である。透かしは下方半分しか残存していないと思われるが、その形状は花文様のように、下方の3弁が残存している。この透かしを内面から見ると、はみ出した粘土が鋭利な工具によって掻きとられており、非常に丁寧な作りとなっている。

10は土師器の甕口縁部である。小片であるため詳細は不明だが、古墳時代後期以降のものである。11は口縁端部に擬凹線が施された弥生時代後期の壺である。近くに弥生時代の遺跡が埋もれていることを示唆している。

出土遺物の大半を占める須恵器を観察すると、9を除けば全て高広編年のⅡA、ⅡBに収まっていた。1区の丘陵中腹平坦面は7世紀初頭から7世紀中葉にかけて利用されていたようである。



第11図 南東端丘陵出土遺物実測図 (1/4)

注(1)『高広遺跡発掘調査報告書』島根県教育委員会 (1984年)

③地すべり跡 I (第12図)

遺構を検出した1区平坦面の西方斜面で地山を追いかけて掘削したが、かなり深掘りしても明瞭な地山を検出することができなかった。

そこで、等高線と直角の方向にトレンチを1本設定して掘り下げてみたところ、何層もの土層の重なり合いを確認した。一部には小さな炭も混入していたため、深いレベルに遺構面が存在する可能性が捨てきれなかったため、畦を1本残して面的な掘り下げをおこなった。1~1.5m掘り下げた結果、固く締まった地山面を検出したが、その面は凹凸が著しく不整形で、遺構面は存在せず遺物も出土しなかった。

改めて畦の土層を観察したところ、多くの層に分層できたが、自然堆積でも人為的でもおこり得ないような不思議な土層の重なり合いを呈していた。酒井哲弥氏の教示によれば、この状況は地すべりの跡ということである。畦の両面で土層の整合性が無いことも地すべりの特徴で、1度に起こった地すべりではないことも判明した。

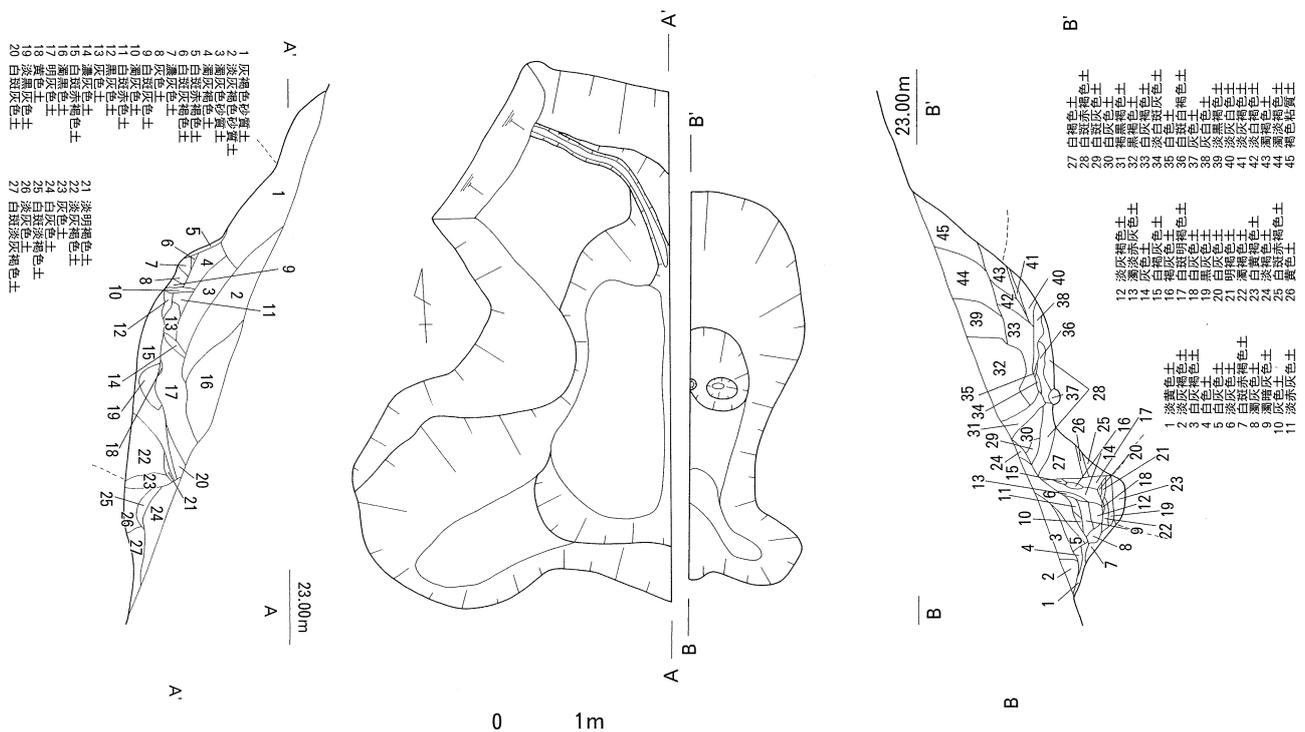
遺構ではないことが判明したことから、この場所の調査は終了とした。

④溝SD03と周辺の遺構 (第13図)

1区の丘陵中腹平坦面の西側には急斜面があり、その斜面の下、標高21.50m付近において溝SD03と若干のピットを検出した。

SD03は等高線とほぼ平行に掘られた溝で、長さ2.8m、幅10~40cm、深さ12cmを測る。断面はU字状で(A-A')、埋土は炭を多く含む暗灰褐色土である。その底部からは自然石2個と小さな土師器の破片が出土した。土器の器種や時期は判別できなかった(第14図)。

SD03の性格は、その立地から下方への流水を防ぐ排水溝と考えられるが、その西側で掘立柱建物跡を見つけることはできなかった。



第12図 丘陵斜面の地すべり跡 I 土層図 (1/80)

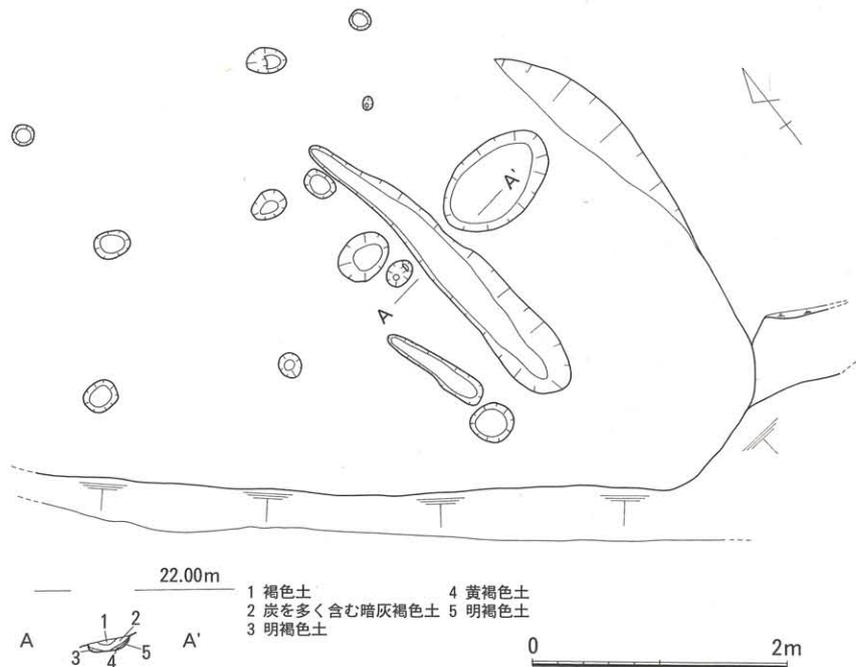
【2区】

①地すべり跡Ⅱ（第15図）

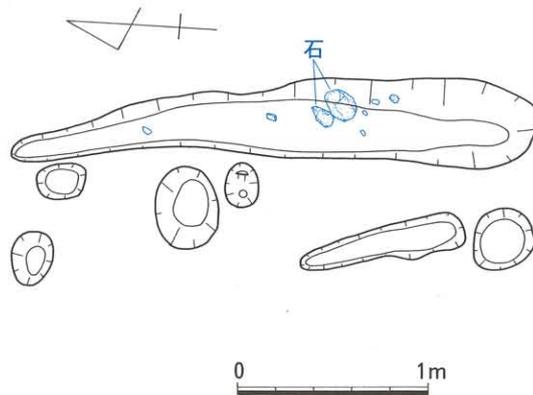
2区の台地状地形の東端は、旧河道Ⅱである。

旧河道01は丘陵を流れ落ちてきた水が勢いを増して地面をV字状にえぐり、その跡に有機質を含む土が堆積したと思われる（B-B'）。堆積土中からは微量の炭が出土したが、遺物は出土しなかった。旧河道01の時期は不明である。

この旧河道を下方に向かって掘り進んだところ、突然堆積土の様子が変化した。断面が急に深くなり、土層が単層から複雑な堆積層へ変化した。西側の地山の下へ潜り込んだのである。この変化後の土層を観察するために畦を設定した。畦A-A'を見ると、比較的締まりの無い多数の土層がほぼ自然堆積に近い状況を呈していたが、遺物は出土せず、遺構とも考えにくかった。この状況を酒井氏に見ていただいたところ、非常に大規模な地すべりの跡であることが判明した。大きな地山の土塊が北西にすべったとき、すべらなかつた地山との境界に空洞ができ、そこへ土が堆積していった状況がA-A'



第13図 SD03と周辺の遺構（1/60）



第14図 SD03遺物出土状況（1/40）

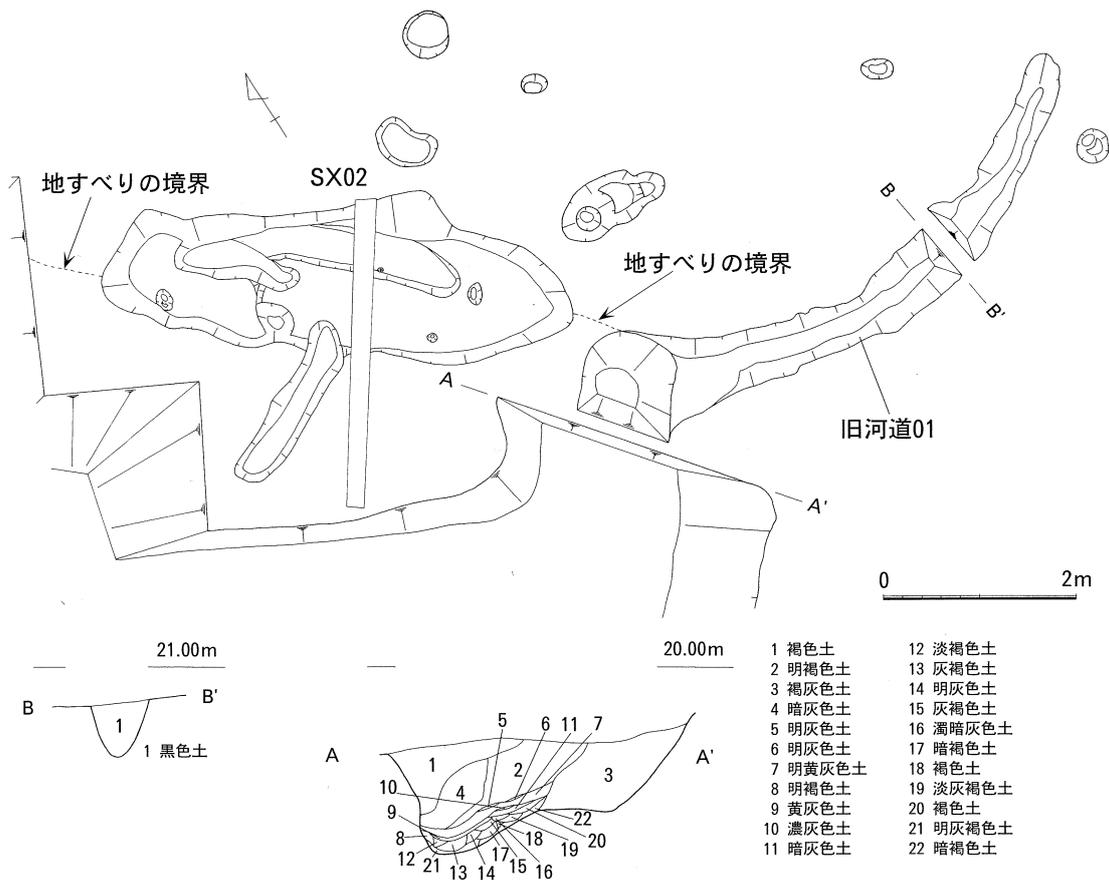
と考えるとよいとのことである。

旧河道01のすぐ西側にはSX02が位置しているが、その形状は極めて不自然な状態であった（第16図）。床面がフラットではなく、西端は凹凸面となっている。また、フラット面は南側に広がるはずであるが、南側には壁が立ち上がっていたのである。南北トレンチのA-A'（第16図）を見ると、立ち上がっている壁の土層はまさに地山のような層1層だけであった。この単一層こそが大きな地すべりによってこの場所に移動してきた土の塊なのである。

酒井氏によれば、SX02の東側上方にあった地山がすべり落ちてきて、SX02の南側半分は西方に移動している。また、SX02の残留した遺構も大きな地表変化の影響を受けて形状が変化したであろうし、それ自体も移動している可能性も考えられなくはない、とのことである。

ここは水的作用によって非常に地すべりが発生しやすい場所となっており、複数の地すべり跡が存在している可能性がある。その中で最も新しい大規模な地すべり跡は、地山の色やSX02に設定したトレンチの土層から判断して、第15図に示したラインと推定する。そして、その広がりには第25図のセクション図に見られるように、2区の台地状地形の場所とほぼ一致しており、3区に近づくにつれて地すべり層の厚みは薄くなっている。

では、この最も新しい地すべりの時期はいつ頃起きたのか。地すべり層下に存在する遺物包含層の遺物の中で最も新しい遺物は、江戸時代初期の天目茶碗であった。したがって、江戸時代初期以降ということは確実なところである。



第15図 旧河道01と地すべり跡Ⅱ (1/80)

②性格不明の遺構SX02 (第16・17図)

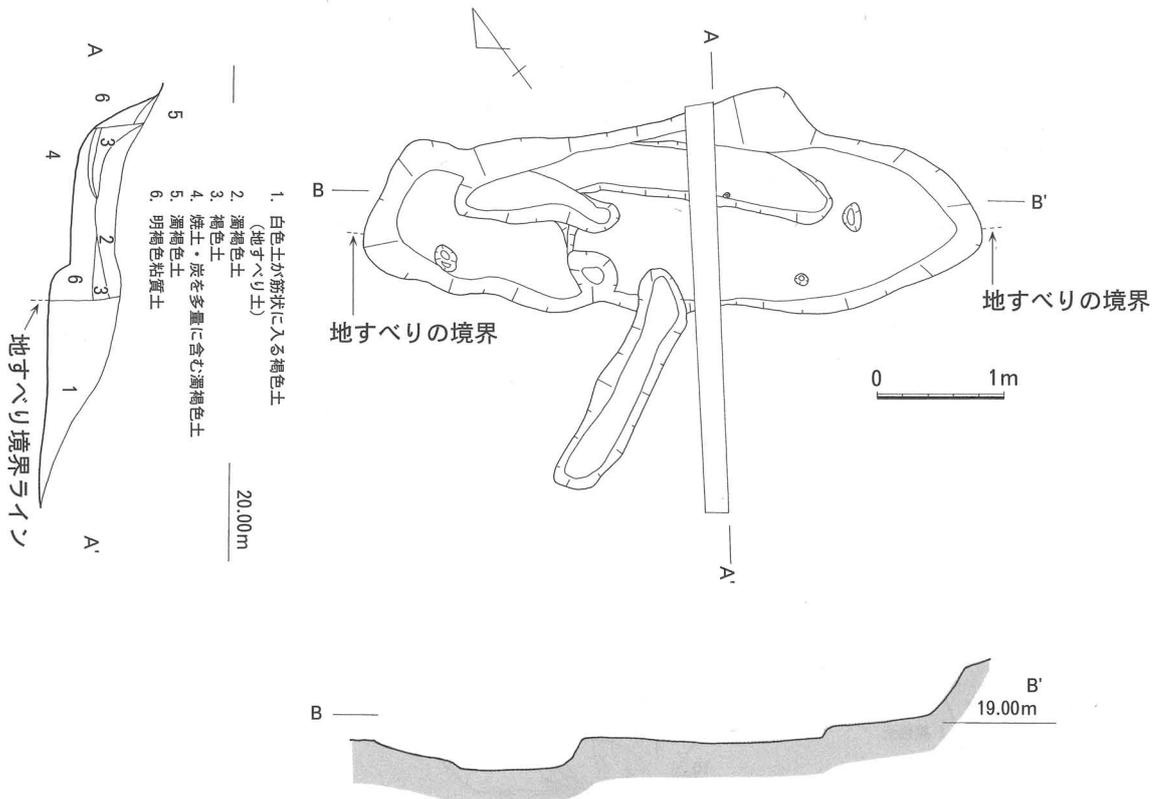
加工段の一部のように見えるが、地すべりの影響を大きく受けて変形が著しく原型をとどめていないため、性格不明の遺構SX02とする。

まず、大きな地すべりによって失われた範囲を確認した。遺構の左右に点線で示しているラインが地山の色の变化から判断できる地すべり土との境界で、中央トレンチA-A'にみられる「白色土が筋状に入る褐色土」の層がすべってきた地山である。したがって、本来の遺構は北側の1.4m程度である。また、本来の遺構についても地すべりの影響が大きく、西側半分の床面には凹凸があり、断面B-B'を見ると不自然な左下がりになっていることがわかる。

残った遺構を観察すると、加工段の東西幅は4.8m前後、北壁の地山カットの深さは残存部で30cmを測る。北壁沿いに幅48cm、深さ7cmの溝が掘られているが、東側は端まで延びず中途半端に途切れ、西側は形状が不明になっており、埋土は「焼土・炭を多く含む濁褐色土」である。

ピットは3ヶ所検出したが、直径10~15cmと極めて小さくて浅く、柱穴とは考え難い。位置関係にも規則性は存在しなかった。

床面の東寄りの場所には炭が散乱しており、床面全体からは須恵器を中心とする比較的多くの遺物が出土した(第17図)。出土遺物には、須恵器の蓋4点、高坏の坏部1点、土師質土器の坏底部2点があった。

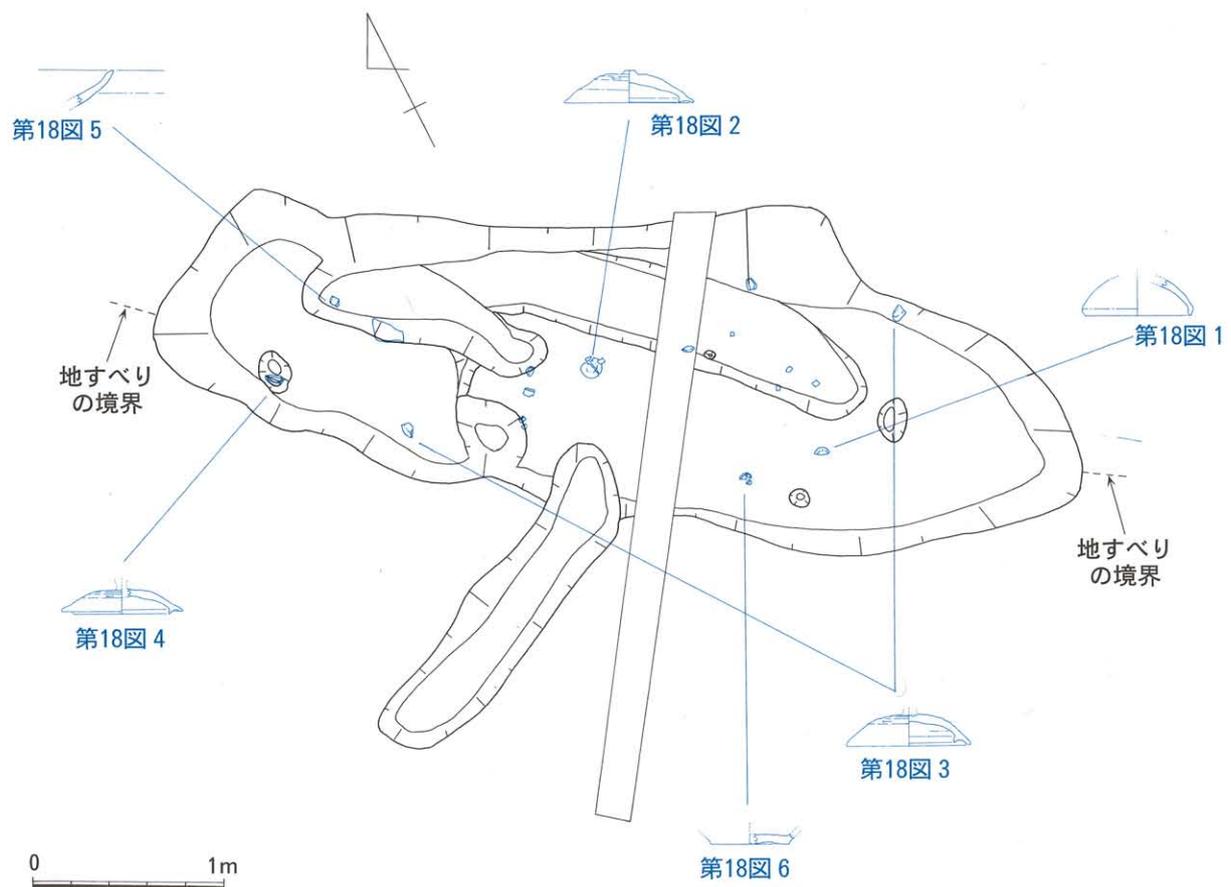


第16図 SX02遺構図 (1/60)

第18図の1は須恵器の蓋で、復元口径8.4cmを測る。高広編年のⅡAに分類される。2、3、4はかえりが付くタイプの蓋で、高広編年のⅡBに入る。2は完形で出土したもので、小さくて低い円形をつまみが貼り付けられている。口径10.3cm、器高2.7cmを測る。3は口径9.85cm、4は口径7.5cmを測る。5は高坏の坏部で、高広編年ⅡBに入る。

6、7は土師質土器の坏底部で、6は底径6.2cm、7は底径5.8cmを測り、底部には回転糸切り痕が見られる。6、7の土師質土器は、1～5の須恵器よりも新しい時期のものであり、同時に使用されることは考えられない。土師質土器は残存状況の悪い小破片で、若干床面から浮いたレベルで出土したことから、SX02が埋もれた際の紛れ込み遺物と考えたい。

須恵器類は1区と同様、高広編年ⅡA～ⅡBの範囲に収まっており、SX02は7世紀前葉から中葉の遺構と判断する。



第17図 SX02遺物出土状況 (1/40)

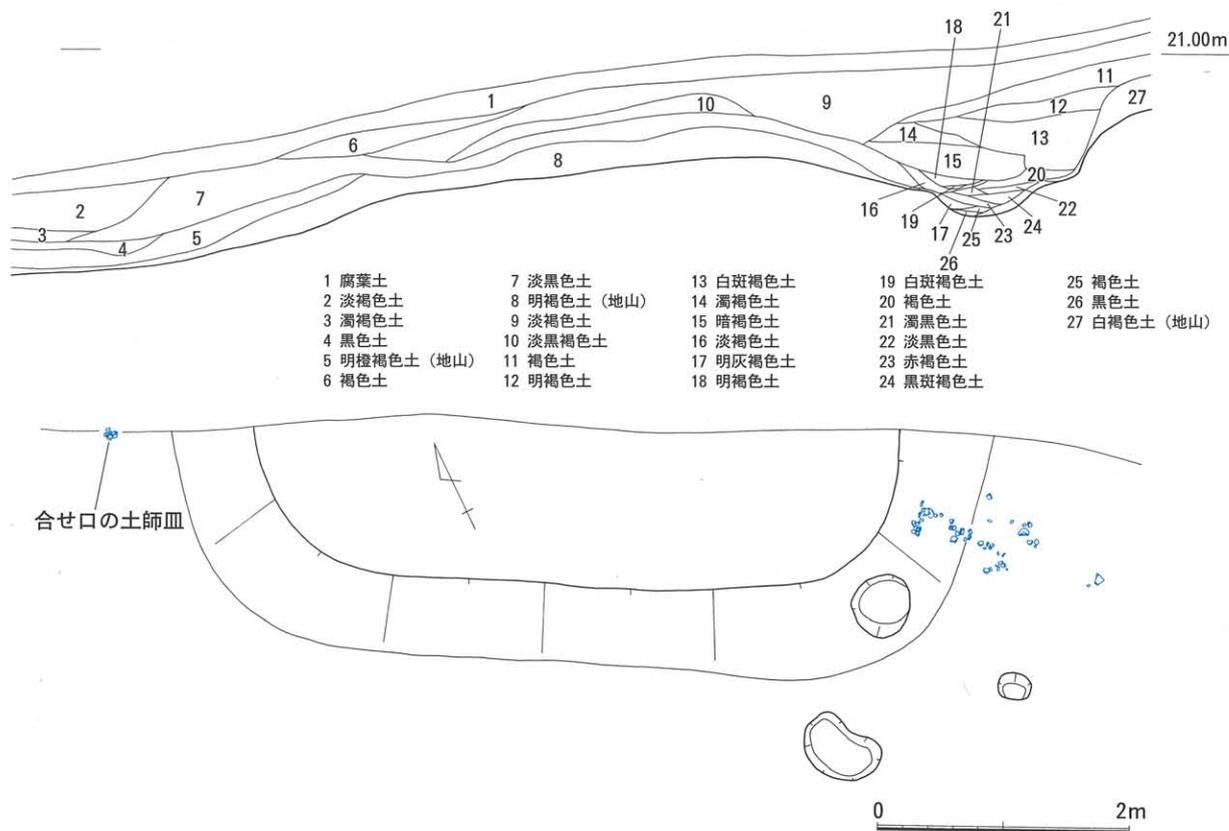


第18図 SX02出土遺物実測図 (1/4)

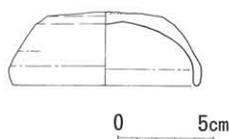
③性格不明の遺構SX03（第19図）

SX02の北にある、地山が「コ」の字形に小高く残るよう加工された地形をSX03とする。

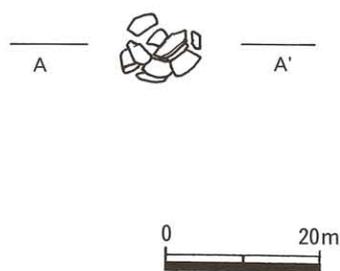
北壁の土層を観察すると、山側に溝があり、調査区外の地形と考え合わせると一辺7.5mの方墳のように見える。しかし、小高く残された場所の地山直上には、旧表土を集めたような「淡黒色土」層（第19図7層）が厚くのっている。旧表土上に盛土された古墳は多いが、旧表土層の厚さが10～20cmとなると不自然である。主体部は検出されず、存在するとしてもそれは調査区外にある可能性が高い。



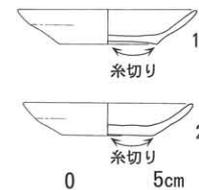
第19図 SX03の土層と遺物出土状況 (1/60)



第20図 SX03周辺出土遺物実測図 (1/4)



第21図 合わせ口の土師質土器 (皿) 出土状況 (1/10)



第22図 土師質土器実測図 (1/4)

ここでは性格不明の遺構とする。

SX03の東側の溝からは、多量の炭と土師器、須恵器が出土した。土師器は風化が著しい小片ばかりであったが、おそらく甕であろう。須恵器は蓋が出土した（第20図）。天井部がヘラ切り後無調整で、口径10cm、器高3.9cmを測る。高広編年ではⅡAに分類され、SX02出土の須恵器との時期差がほとんど無い。

④合わせ口の皿（第21図）

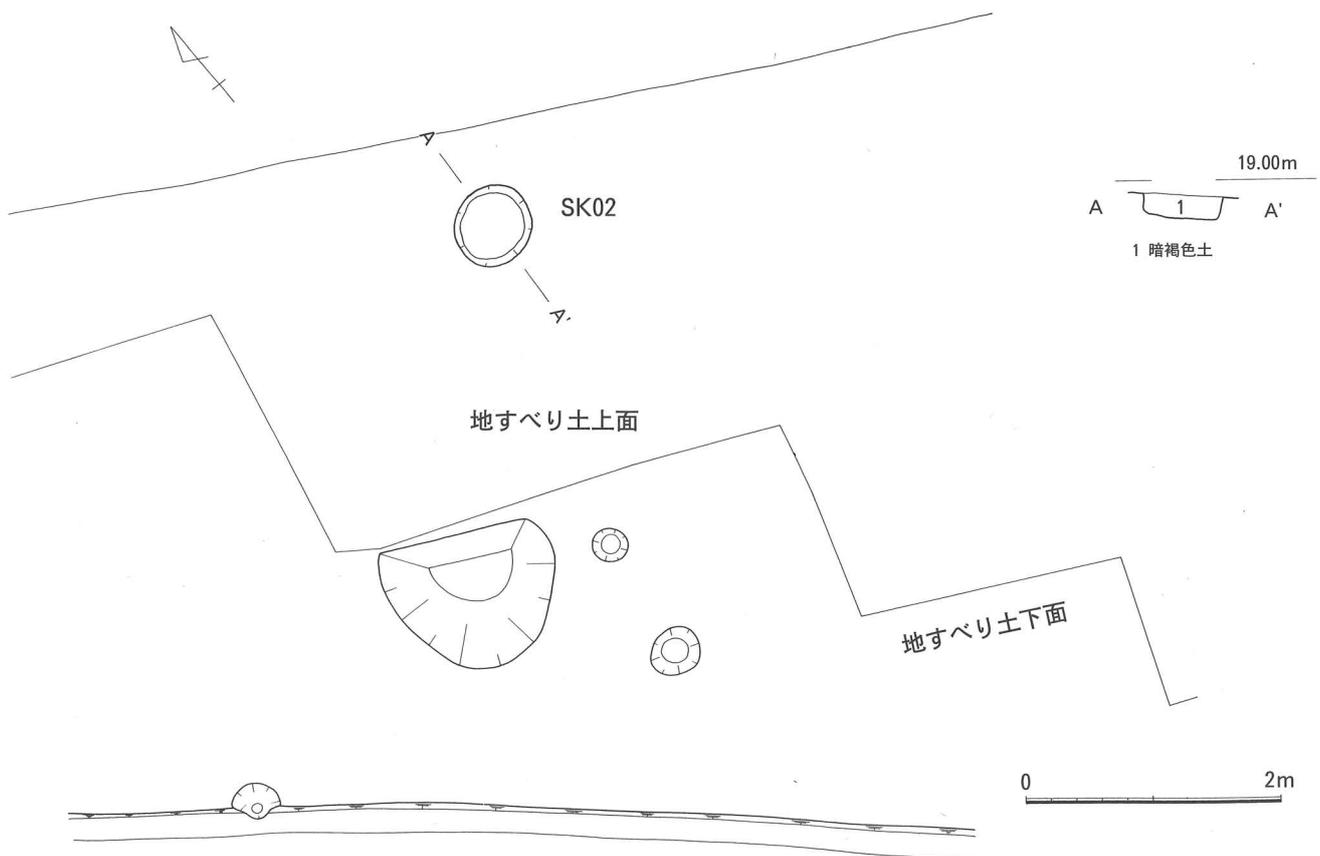
重機で表土掘削をしている際に、SX03の西60cmの地点から土師質土器の皿2枚が出土した。表土直下の淡褐色土層の中で、皿の口縁と口縁が上下に合わされて円盤のような状態で出土した。本来は2枚の皿の間に何かを収めていたと思われるが、出土時には土しか入っていなかった。

上の皿（第22図1）は口径9cm、底径4.8cm、器高1.7cmを測り、下の皿（2）は口径9.45cm、底径5.1cm、器高1.85cmを測り、底部外面はいずれも回転糸切りであった。

江戸時代以降の祭祀に関連する遺物と考える。

⑤地すべり跡Ⅱ上面の遺構（第22図）

地すべり跡Ⅱの上面で検出した遺構は土坑SK02のみである。SK02は平面プラン円形で直径60cm、深さ22cmを測り、埋土はふかふかの濁褐色土1層である。時期は不明であるが、埋土の軟らかさから現代または近代の遺構と思われる。



第23図 地すべり層上面の遺構と下面の遺構（1/60）

⑥地すべり跡Ⅱ下の遺構

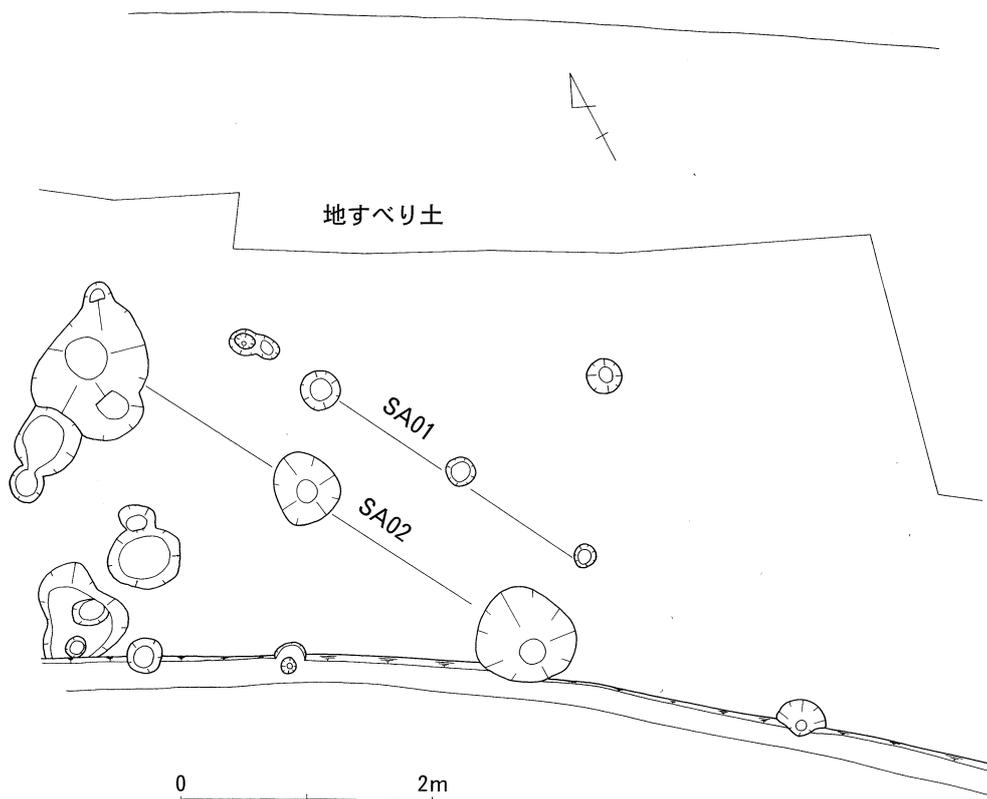
加工段01付近の地すべり土層は約1.4mの厚さがあった。酒井氏の指摘によれば、3区寄りの北壁セクション（第25図4・5・6層）には、東上方から地山が砕けながら押し寄せた地すべりの状況がよく表れているという。地すべり層の下には遺物包含層「炭混じりの灰色土」があり、その下の地山面では多数の遺構を検出した。

地すべり跡Ⅱの東端付近では遺構の密度が低かったが（第23図）、西へ行くほどその密度は高くなり（第24・25図）、ピットを中心として、大きさ、形状ともさまざまな遺構が現われた。西側の遺構密度が高い場所では遺構の切り合い関係が著しい状況であった（第25図）。

検出した遺構を観察すると、古墳時代の遺物だけを含むものと江戸時代初期の遺物を含むものがあり、少なくとも古代と近世の遺構が入り混じっていることがわかった。埋土に関しては、古代の遺物を含むピットの埋土は堅くしまって炭や焼土片を含む褐色系の色調が多いのに対し、近世の遺物を含むピットの埋土は軟質で灰色を呈する傾向がみられた。

この場所には過去に多くの建物等が存在したと思われるが、遺構埋土の色調やピットのならびから確認できたのは、杭列跡SA01、SA02と掘立柱建物跡SB01である。SA02の場合、掘立柱建物の一部を構成するものである可能性が高いが、明確な根拠が無いので現時点では杭列跡としておく。3遺構の主軸はほぼ平行しているが、その埋土の違いからSA01、02とSB01の間には時期差が存在すると考えられる。主軸は等高線とも平行していることから、建物は新旧を問わず、地形の制約を受けて水平な場所に建てられたものと思われる。

そのほかの遺構としては、土坑SK03、SK04が若干大きく目立っている。SK03は後述するとして、SK04は平面プランが隅丸方形で、長軸1.96m、短軸0.7m、深さ0.56mを測る。埋土は表土と地山が



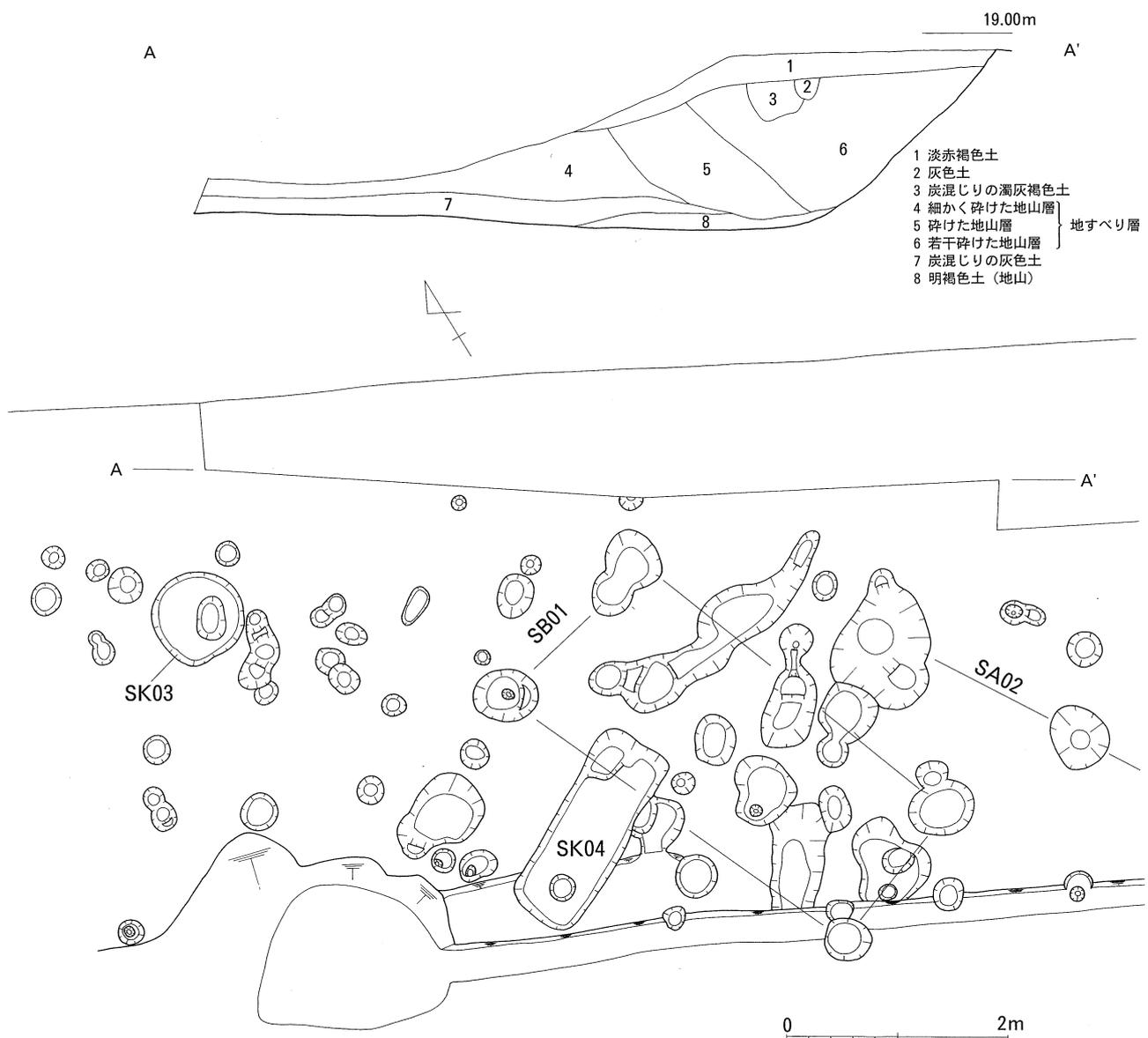
第24図 杭列 (1/60)

混じった非常に軟らかい層で一部には空洞も存在した。遺物は出土しなかったが、埋土の軟らかさから推察して、地すべり層上面から掘られた現代の遺構である可能性が高い。

⑦杭列跡SA01 (第26図)

ピット3ヶ所が直線上にならんでおり、北からp-1、p-2、p-3と称する。p-1は上端直径30cm、下端直径20cm、深さ20cmを測り、埋土は炭混じりの濁灰色土、p-2は上端直径25cm、下端直径16cm、深さ10cmを測り、埋土は中心が杭の痕と推定される炭混じりの灰褐色土で周辺が褐色土、p-3は上端直径20cm、下端直径15cm、深さ13cmを測り、埋土は炭混じりの濁灰色土である。p-1とp-2の心々距離は1.28m、p-2とp-3の心々距離は1.25mを測る。

遺物は出土しなかったが、埋土がいずれも軟らかい灰色系を呈していることから近世以降の杭列跡と思われる。



第25図 地すべり層と下面の遺構 (1/60)

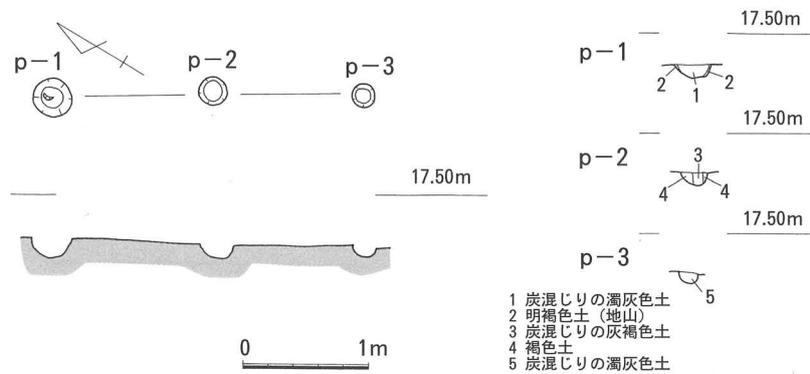
⑧杭列痕SA02（第27図）

SA01の西方90cmで、SA01に平行して位置している。

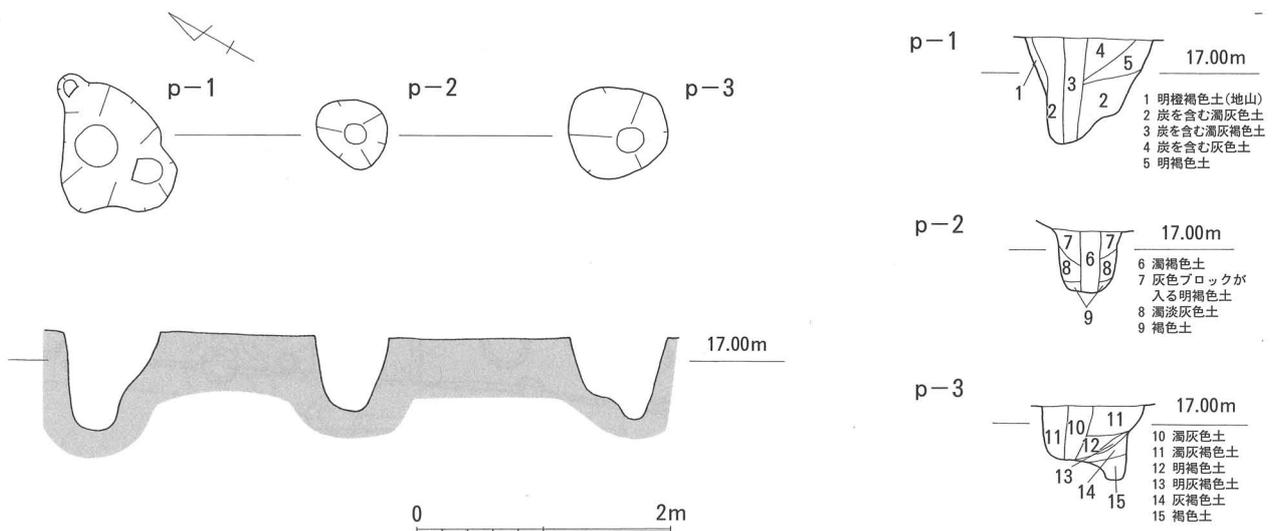
ピット3ヶ所が直線上にならんでおり、北からp-1、p-2、p-3と称する。p-1は上端直径74cm、下端直径34cm、深さ80cmを測り、埋土は中心に直径15cmの杭痕が残る灰色土系、p-2は上端直径54cm、下端直径28cm、深さ60cmを測り、埋土は中心に直径16cmの杭痕が残る灰色土系、p-3は上端直径72cm、下端直径21cm、深さ55cmを測り、埋土は直径17cmの杭痕が残る灰色土系である。p-1とp-2の心々距離は2.14m、p-2とp-3の心々距離は2.25mを測る。前記したとおり、ピットの掘り方が大きく深いことから掘立柱建物の一部である可能性が高いが、このピット列に対応するピットが見当たらないため、現時点では杭列跡としておく。

伴出遺物としては、p-2埋土中から国産の天目茶碗（第30図4）の口縁部が出土した。この破片は遺物包含層から出土した底部と接合することができ、法量は口径12.2cm、底径4.4cm、器高6.4cmを測る。外面の底部以外は鉄釉が施されて黒褐色を呈しているが、釉の塗布は非常に雑で見込みには露胎部が目立っている。生産時期は17世紀初頭である。

ピット埋土が軟らかい灰色系であったこと、近世初頭の天目茶碗が出土したことからSA02は近世初頭またはそれ以降の杭列跡と判断する。



第26図 SA01 (1/60)



第27図 SA02 (1/60)

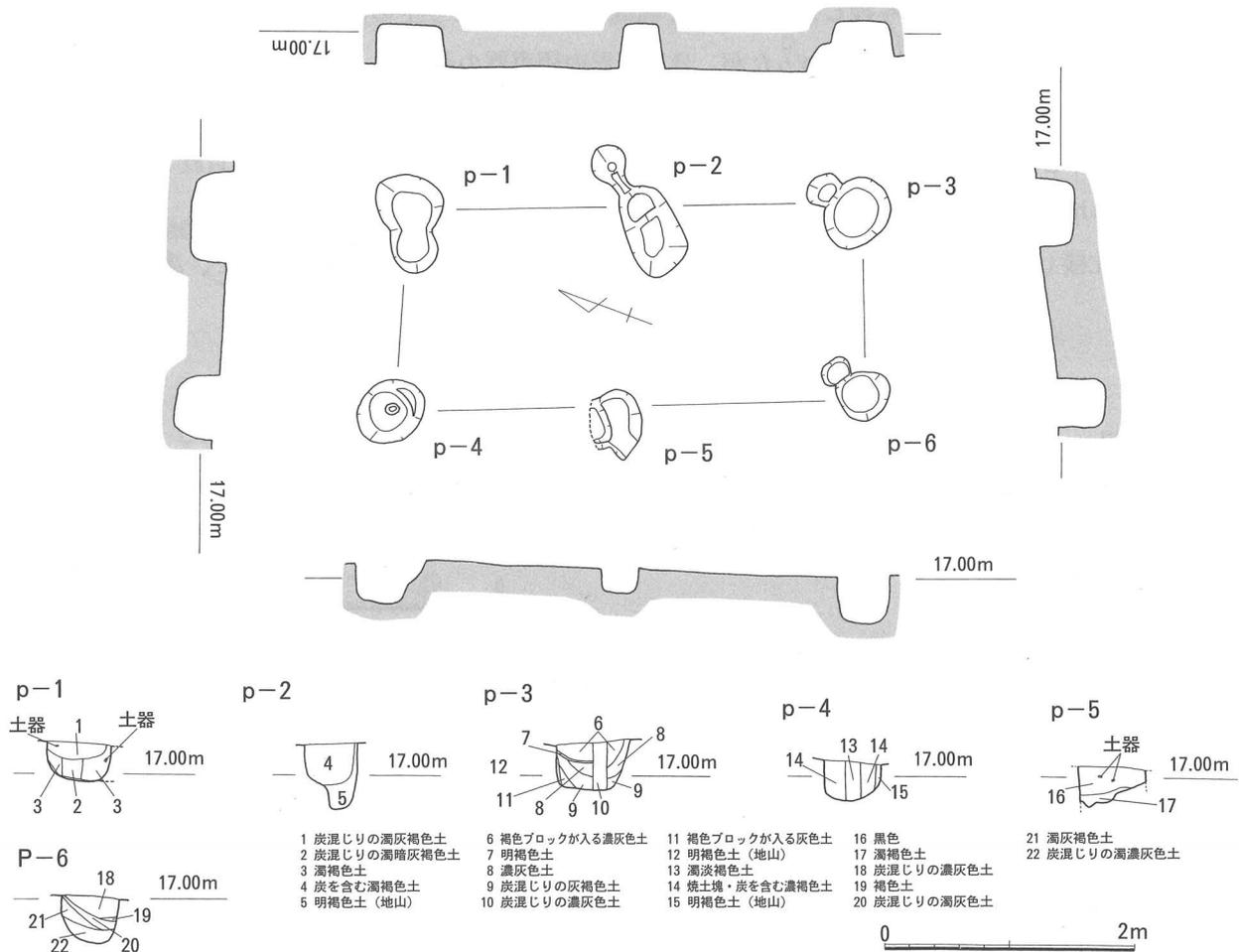
⑨掘立柱建物跡SB01（第28図）

1間×2間の掘立柱建物跡SB01で、SA02の西方約1mに位置している。

ほぼ同じ深さのピット6ヶ所が等間隔にならんでいて、東列の北からp-1、2、3、西列の北からp-4、5、6と称する。ピット間の心々距離はp-1とp-2間が1.9m、p-2とp-3間が1.8m、p-3とp-6間が1.55m、p-6とp-5間が2.0m。p-5とp-4間が1.86m、p-4とp-1間が1.67mを測る。

p-1は他のピットと切り合い関係があるが、本来は上端直径54cm、下端直径30cm、深さ32cmを測り、埋土は直径16cmの柱痕が残る堅い灰褐色土系、p-2は上端直径34cm、下端直径28cm、深さ32cmを測り、埋土は堅い濁褐色土、p-3は上端直径54cm、下端直径36cm、深さ42cmを測り、埋土は直径10cmの柱痕が残る堅い灰褐色土系、p-4は上端直径54cm、下端直径31cm、深さ29cmを測り、埋土は中心に直径12cmの柱痕が残る褐色土系、p-5は上端直径56cm、下端直径30cm、深さ26cmを測り、埋土は濁褐色土～黒色土、p-6は上端直径48cm、下端直径32cm、深さ44cmを測り、埋土は灰褐色土系である。

ピット間の共通点としては、深さが近似していること、埋土が堅くしまった濃褐色土系を呈し焼土片や炭を多く含んでいることがあげられる。土器の小破片も多く含んでおり、p-6からは須恵器の



第28図 掘立柱建物跡SB01（1/60）

坏の破片（第30図2）が出土した。この坏は口縁の立ち上りが低いタイプで、口径10.7cm、受部径13.2cmを測る。高広編年のⅡAにあたり、7世紀初頭から前葉に位置づけられるものである。

したがって、SB01は7世紀初頭から前葉またはそれ以降に建てられたと考えられる。また、ピット埋土に炭や焼土片などの生活遺物がたくさん含まれていたことから、周辺では既に人々が生活を営んでいたことがわかった。

⑩土坑SK03（第29図）

2区と3区の境界付近に位置している。

平面プラン検出時に自然石の集積が見られたので、それらを残して半裁をおこなったところ、土坑は浅いが二段掘りであった。上段が上端直径84cm、下端直径78cm、深さ18cm、下段が上端直径12cm、下端直径8cm、深さ5cmを測る。埋土は水平堆積で、遺物は出土しなかった。時期は不明である。

【3区】

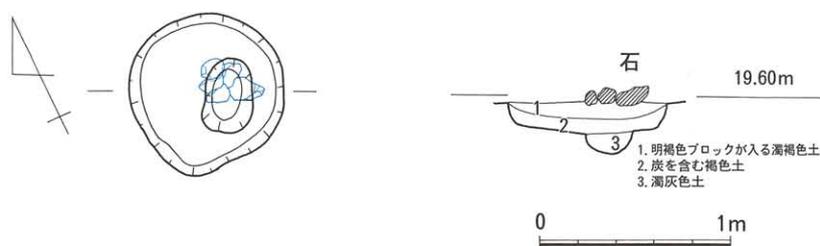
①段01（第31・32図）

地山を東西3.8mにわたってカットして平坦地を造っている。

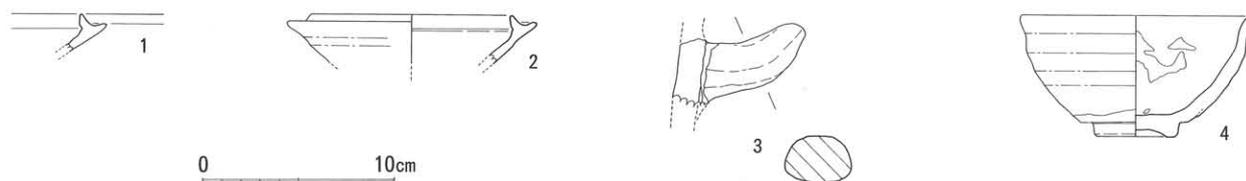
第31図のB-B'を観察すると、残存するカットの深さは10cm程度で、壁帯溝は無く、平坦面には炭が散乱していた。建物跡を探したが、建物を構成するようなピットの配置は見つからなかった。

出土遺物は土師器の小破片が多かったが、ほぼ完形の須恵器の蓋1点（第33図）が出土した。蓋は、口径12.4cm、器高4.75cmを測り、外面にはナデ沈線が広い間隔を空けて2条廻らされている。時期は高広編年のⅠBの範疇に収まると考えられ、実年代では6世紀末～7世紀初頭と考えられる。したがって、この平坦面は6世紀末～7世紀初頭に利用されていたと考えられる。

段01に北接して土坑SK04が位置する（第31図）。調査区外に続く不整形な土坑で、溝になる可能



第29図 SK03 (1/40)



第30図 2区の遺構内出土遺物実測図 (1/4)

性もある。深さは8 cm前後と浅く、底部はフラットである。土坑内から風化が著しい土師器の破片が多数出土したが（第32図）、器形、時期とも不明である。

②加工段01（第31・34図）

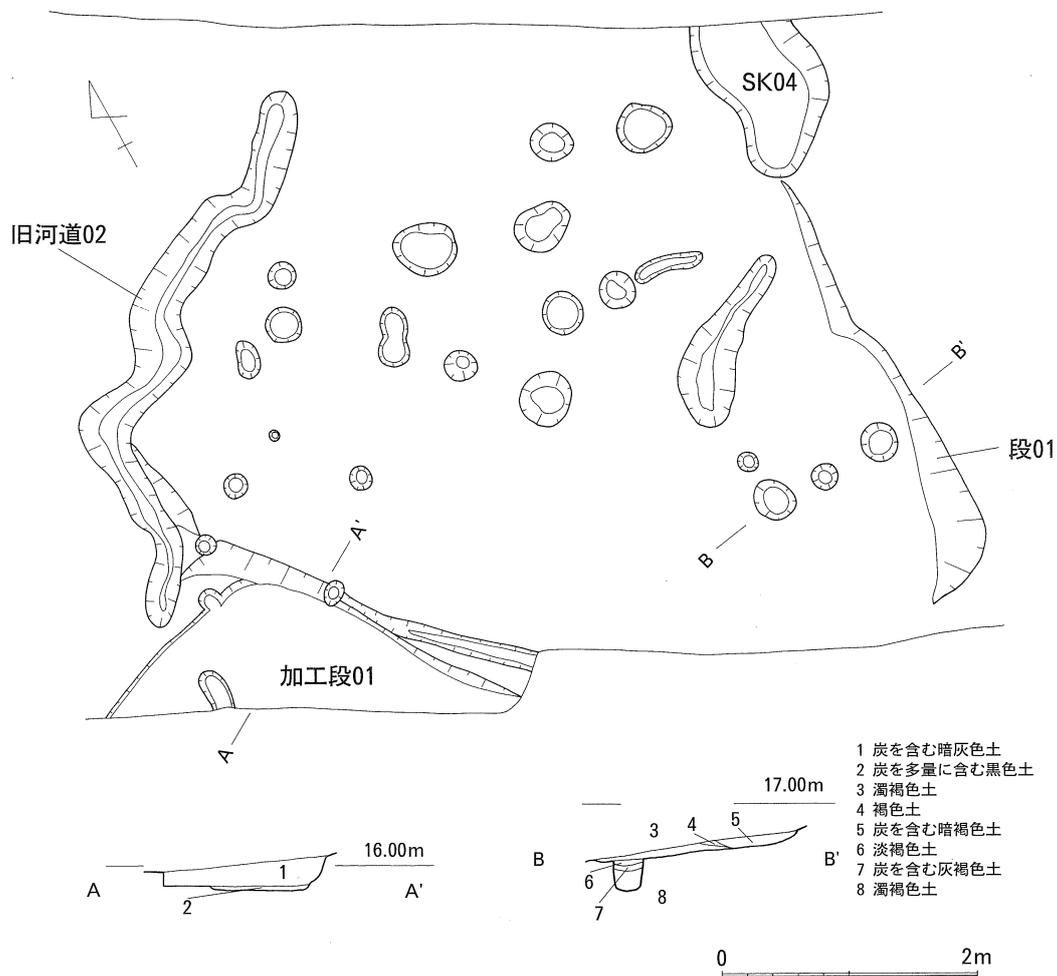
遺構の大半が調査区外にあるため、性格は不明である。

第31図のA-A'を観察すると、残存する地山カットの深さは30cmで、壁帯溝は無く、床面には大量の炭が残っていた。床面では調査区外へ延びる幅20cm、深さ4 cm前後の溝状遺構を検出したが、ピットは検出できなかった。

遺物は自然石1個のほか、土師器と須恵器の破片が若干出土した（第34図）。自然石の用途は不明である。須恵器の蓋（第35図）は床面から出土したもので、口径14.2cmを測る。外面の天井部は回転ヘラケズリで、肩部には段がつき、口縁端部内面にはナデ沈線が廻らされている。高広編年のI A、6世紀後葉にあたる。

③溝SD04・05とその周辺（第36・37・39・40図）

加工段01の北側には、調査区を分断するように旧河道02が位置している。旧河道02の断面は、場所

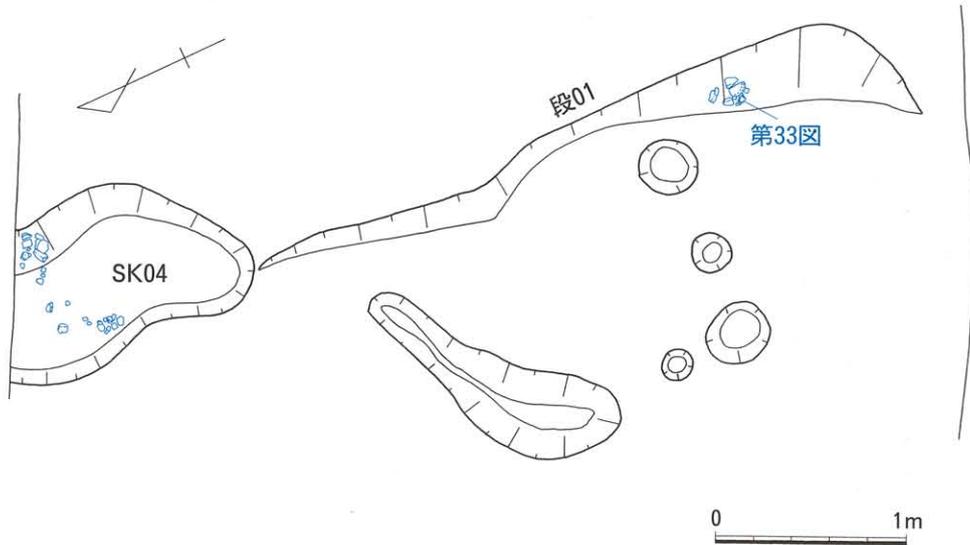


第31図 段03と加工段01と周辺の遺構（1/60）

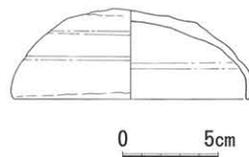
によって深さが異なるV字状で、埋土は若干の炭を含む黒色土1層である。遺物は出土していないため、時期は不明である。

旧河道02の西には平坦面があり、溝2本とピットが散在していた。

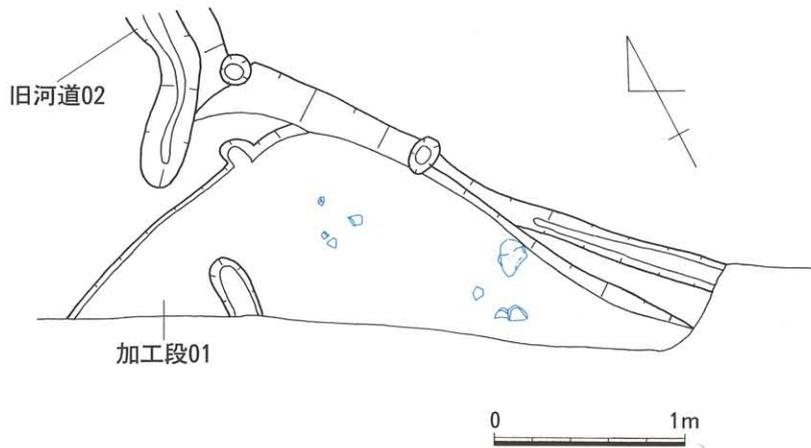
溝SD04は、南端が浅くて明瞭でないが、平面プランはほぼ直線で幅40cm、残存長2.8m、深さ7cm



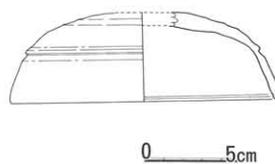
第32図 段01周辺の遺物出土状況 (1/40)



第33図 段01床面出土土器実測図 (1/4)



第34図 加工段01遺物出土状況 (1/40)



第35図 加工段01出土遺物実測図 (1/4)

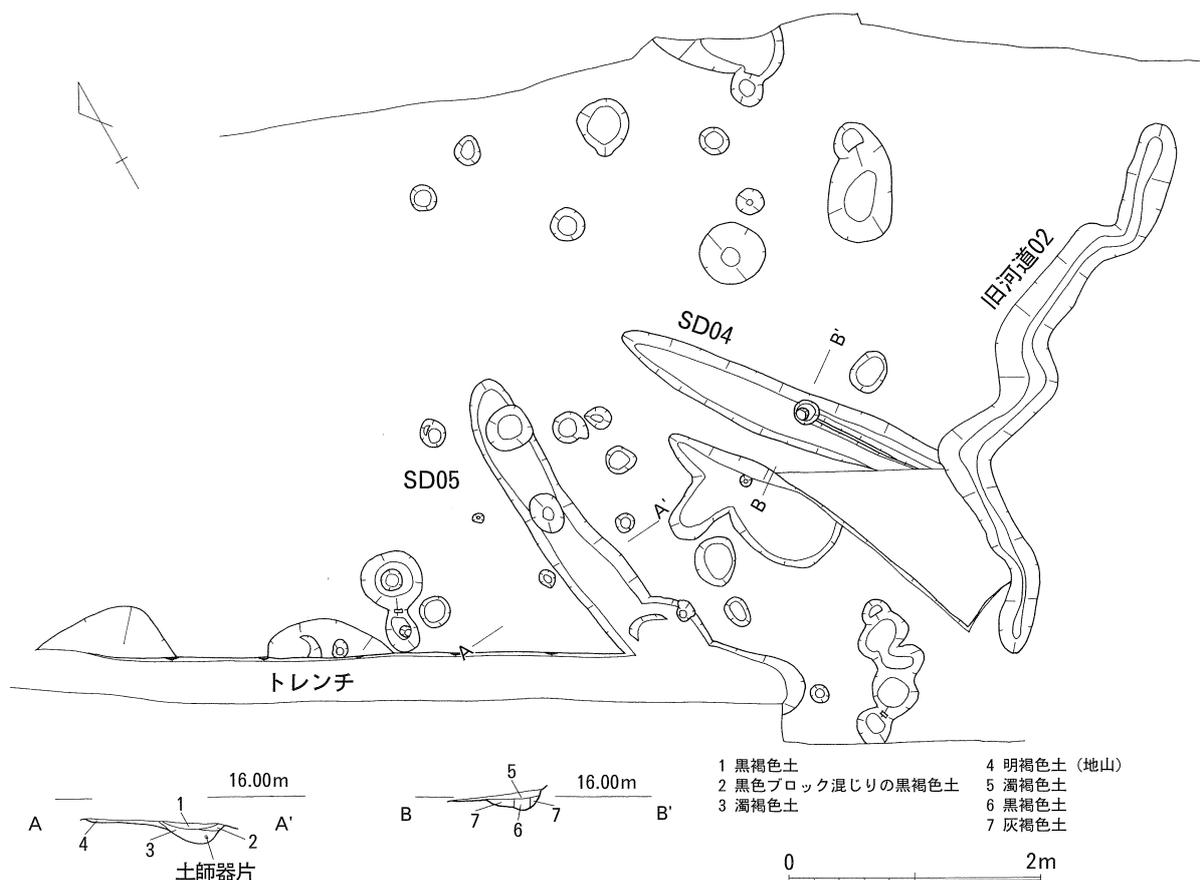
を測る。断面は第36図B—B'のとおり緩やかなU字状で、埋土は灰褐色土1層である。埋土中から炭や土器の小片が出土したが、時期判別できる遺物は出土しなかった。第38図は、溝に近い遺構面上から出土した土器片（第37図）の内の2点である。

第38図1は須恵器の蓋で、口径12.4cmを測る。肩部の段が突起で表現されており、口縁端部内面には浅い回転ナデが施されている。2も須恵器の坏で、口径13.4cmを測る。肩部には退化した緩やかな段がつき、口縁端部内面には浅い回転ナデが施されている。1、2とも高広編年のI Bに属し、6世紀末～7世紀初頭にあたる。

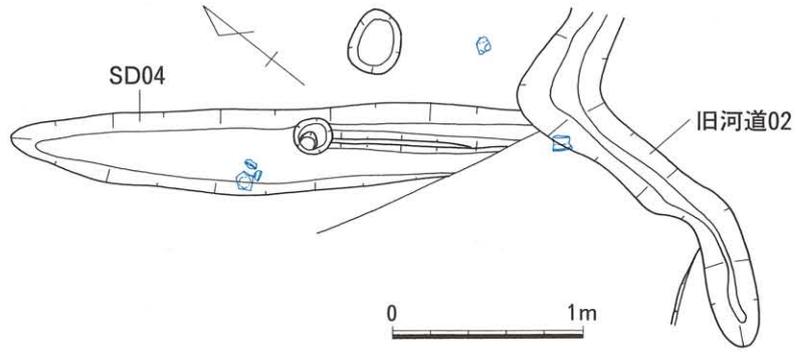
溝SD05は、若干西に張り出して弧を描いており幅46cm、長さ3.6m、深さ20cmを測る。断面は第36図A—A'のとおり緩やかなU字状で、下層が濁褐色土、上層が黒褐色土で、下層は炭や土器小片を多く含んでいた。比較的大きめな土師器の甕または壺の胴部破片が出土した（第39図）が、風化が著しく時期は不明である。ほかに時期を判別できる破片は出土せず、SD05の時期は不明である。

SD04・05の北方平坦面では若干のピットを検出した。建物跡は見つからず、遺構面で自然石の散在を確認した。このあたりを中心として遺物包含層から鉄滓（図版16下）が多く出土しており、鍛冶をおこなっていたと思われる。焼土面は検出できず、製品は出土しなかった。

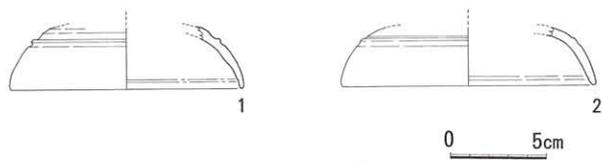
第41図はSD04・05周辺の遺構面から出土した土器である。1は須恵器の蓋で、焼き歪みが著しく、法量は不明である。天井部は回転ヘラ削りで、肩部には退化した緩やかな段がつき、口縁部内面には浅い沈線状の溝が廻らされている。高広編年のI Bにあたる。2、3は土師器の甕である。2は口径



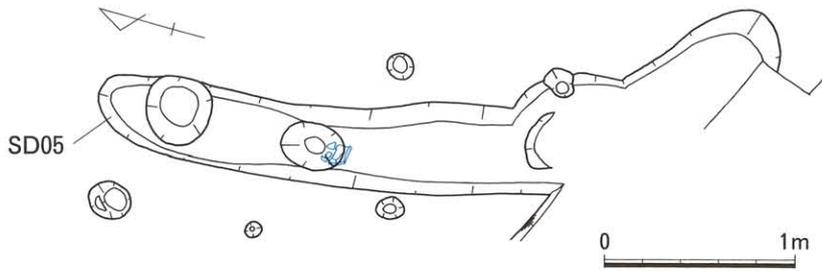
第36図 SD04・05と周辺の遺構 (1/60)



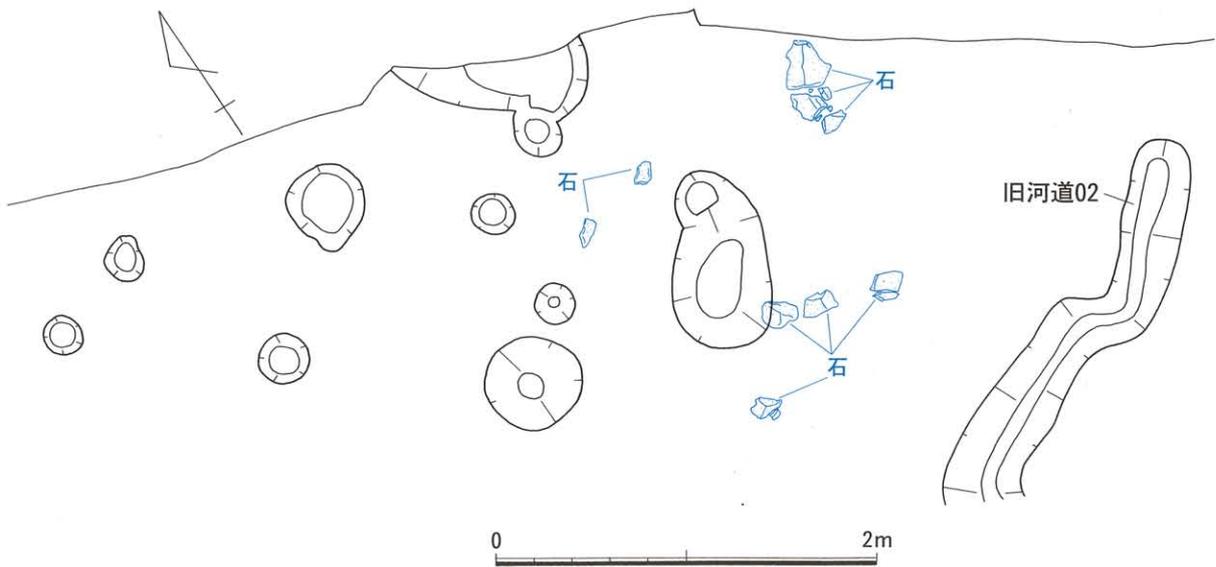
第37図 SD04遺物出土状況 (1/40)



第38図 SD04出土遺物実測図 (1/4)



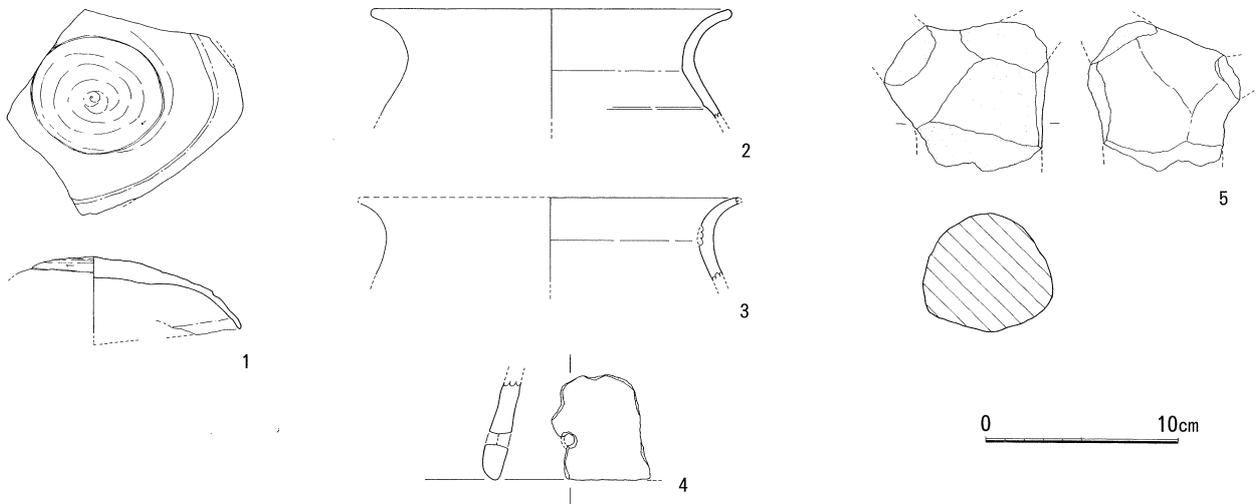
第39図 SD05遺物出土状況 (1/40)



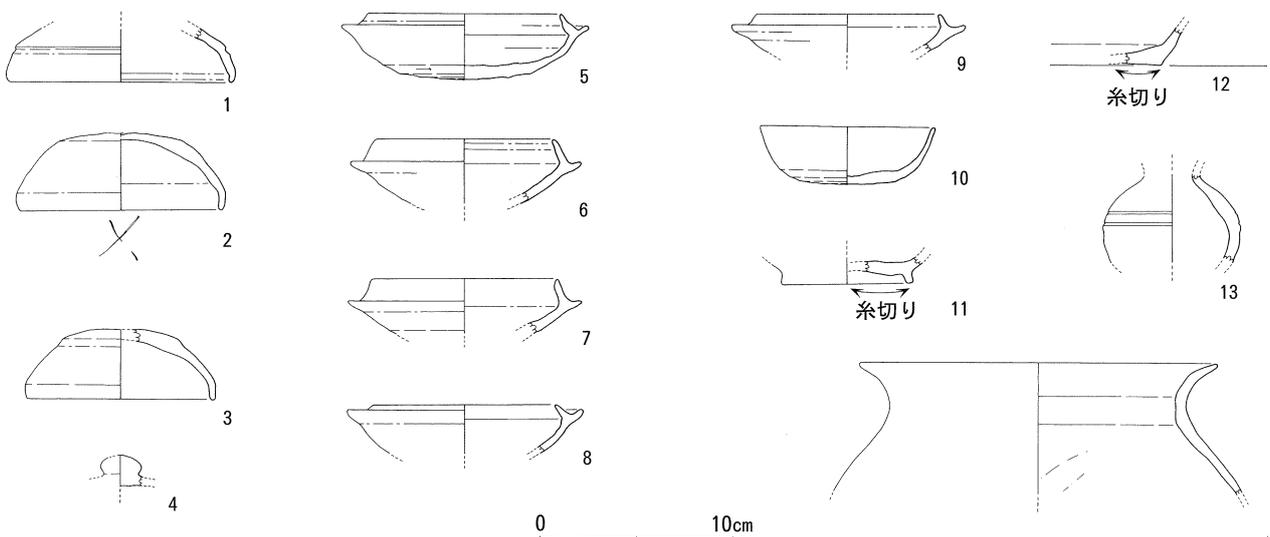
第40図 SD04・05北方の遺物出土状況 (1/40)

19.0cm、頸径15.0cmを測り、3は口径20.2cm、頸径17.2cmを測る。いずれも器面の風化が著しい。4は甑の底部で、孔の一部が残っている。5は土製支脚であるが、残存状況は非常に悪い。

第42図は段03からSD05の間の遺物包含層から出土した土器で、1～4は須恵器の蓋である。1は口径11.6cmを測り、肩部に退化した緩やかな段がつき、口縁端部内面にナデ沈線が廻らされている。2は口径10.6cm、器高4.1cmを測る。天井部外面はヘラ切り後に丁寧なナデ、天井部内面にはヘラ記号「×」が描かれている。肩部には角度の変化のみが残り、口縁端部内面の段は見られない。3は口径9.8cm、器高3.7cmを測る。調整は2とほぼ同じである。4は宝珠つまみである。5～12は須恵器の坏である。5は口径10.2cm、受部径13.0cm、器高3.5cmを測る。口縁の立ち上がりが比較的高く、底部外面には回転ヘラ削りが施されている。6、7も口縁の立ち上がりが比較的高く、6は口径9.4cm、受部径12.1cm、7は口径9.8cm、受部径12.2cmを測る。8、9は口縁の立ち上がりが低く、8は口径9.7cm、受部径12.4cm、9は口径9.6cm、受部径12.3cmを測る。10は口径9.2cm、底径6.0cm、器高3.0cmを測り、底部外面は回転ヘラ削りが施されている。11は高台が付く坏で底径6.9cmを測り、底部外面には回転糸切り痕がある。12は平底で、底部外面には糸切り痕がある。13は須恵器の礎で、頸径2.9cm、

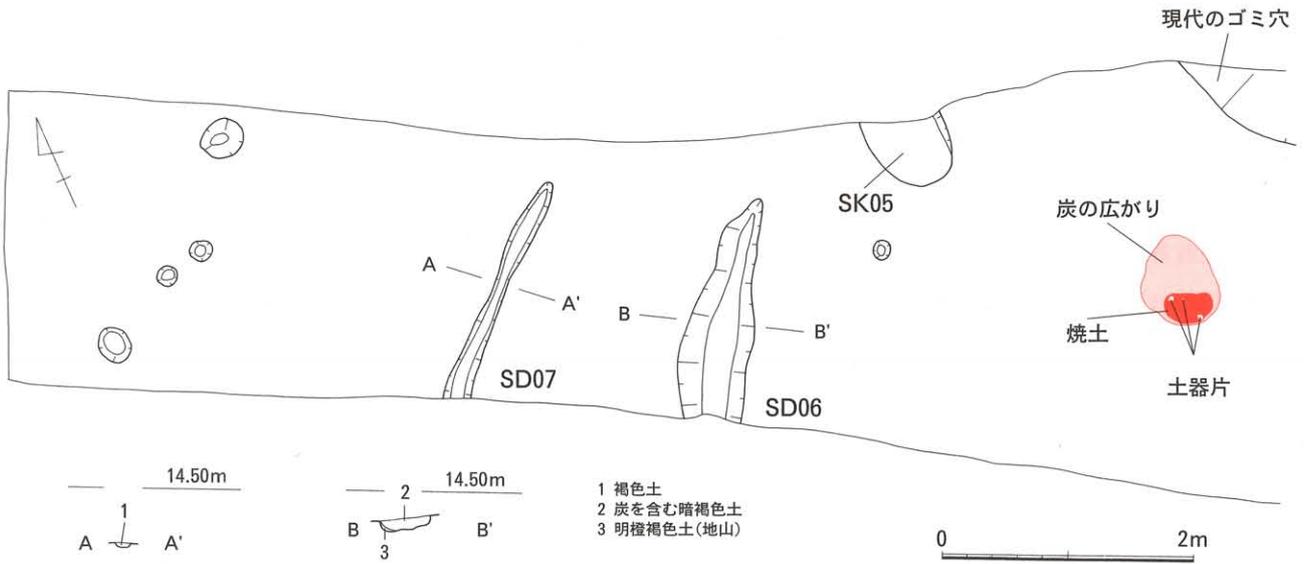


第41図 SD04・05周辺の遺構面出土遺物実測図 (1/4)

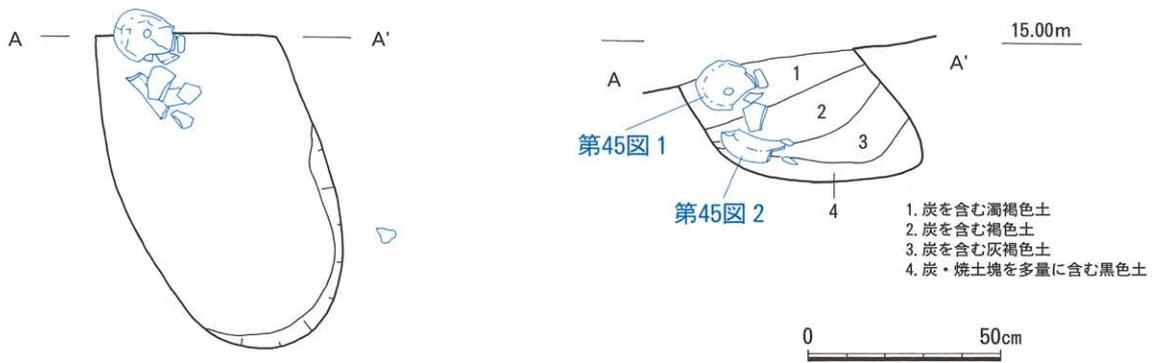


第42図 段03～SD05の遺物包含層出土遺物実測図 (1/4)

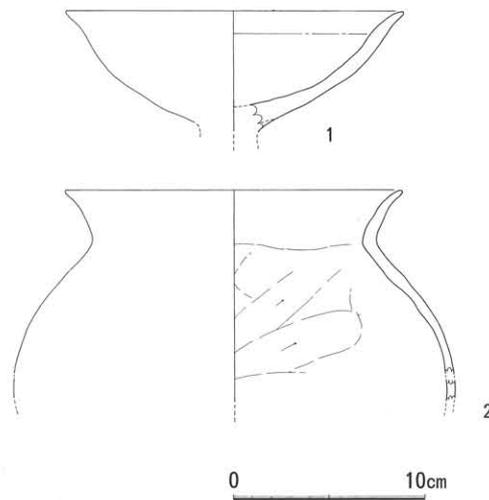
胴部最大径7.2cmを測る。14は土師器の甕で、口径18.8cm、頸径15.6cmを測る。風化が著しいが、胴部内面にはへら削りの痕跡がわずかに残っている。



第43図 SD06・07と周辺の遺構 (1/60)



第44図 SK05 (1/20)



第45図 SK05出土遺物実測図 (1/4)

④溝SD06・07とその周辺（第43図）

調査区最西端部は遺跡内でも遺構面が最も低い。溝SD06・07を検出した付近については現代の攪乱が著しく、一部では遺構面にまで達しており、SD06・07は削平を受けている可能性があることをまず指摘しておく。

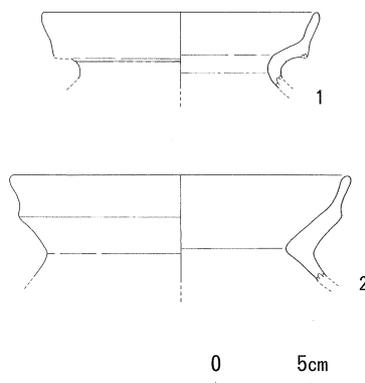
SD06は最大幅60cm、深さ8cmを測り、調査区外へと続いている。断面はB-B'のとおり緩やかなU字状で、埋土は炭を含む暗褐色土1層である。

SD07はSD06とほぼ平行に掘られている。最大幅20cm、深さ4cmを測り、調査区外へと続いている。断面はA-A'のとおり浅いU字状で、埋土は褐色土1層である。

SD06の北西側には土坑SK05（第44図）が位置している。SK05の平面プランは楕円形と思われるが、調査区外に続いているため全体の形状は不明である。確認できる範囲での法量は、短軸54cm、長軸64cm、深さ34cmを測る。断面は第44図A-A'のとおりで、床面がほぼフラット、東側の壁はオーバーハングしている。埋土は最下層が炭・焼土塊を多量に含む黒色土で、上層は3層に分層できるが、いずれも炭を多く含む層である。この土坑の中には比較的完形に近い土器が入っており、須恵器の甕胴部のほか土師器の高坏坏部、甕（第45図）が出土した。

須恵器の甕は、胴部だけが出土したので図面化していないが、器高は40～50cm程度で、胴部は球形に近いと推察する。第45図1は土師器の高坏坏部で、一部に赤色顔料が残っており、口径17.9cmを測る。脚部との接合部を欠損し、円孔が空いている。この坏部の特徴は、煤が口縁端部内面の幅2cmの範囲に帯状に付着していることである。この煤の付着状況は端正な蛇の目状を呈していることから、二次的に利用された可能性が高い。2は土師器の甕で、おそらく完形で埋まっていたと思われるが、風化のため一部しか取り上げられなかった。口径17.8cm、頸径15.0cm、胴部最大径23.2cmを測る。

SD06・07周辺の遺物包含層からは、甕の破片2点が出土した。第46図1は弥生時代後期の甕で、口径14.6cm、頸径10.6cmを測る。2は古墳時代前期末～中期初頭の甕で、口径18.0cm、頸径14.0cmを測る。今回の調査区内には、弥生時代後期～古墳時代中期初頭の遺物を伴う遺構は存在しなかったが、周辺にはこの時代の遺跡が埋もれていることを示している。



第46図 SD06・07周辺遺物包含層出土遺物実測図（1/4）

第4章 結 語

石流遺跡では、東西に細長い調査地のほぼ全面で遺構を検出した。

遺構には、加工段や傾斜地の地山カット、掘立柱建物の柱穴と思われる多くのピットや溝、土坑があり、小さな土器片や炭を伴っていた。古墳のような地形も存在したが、古墳であるか否か明確にできなかったので、石流遺跡は現時点では生活遺跡であったと考えたい。

また、2区では古墳時代後期の土器と鉄滓が出土した。調査地内では明確な製鉄の痕跡は検出できなかったが、周辺では鉄生産をおこなっていたと思われる。

時期については、2・3区で検出した遺構は6世紀後半から7世紀初頭頃の遺物を伴い、1区で検出した遺構は7世紀前葉から中葉の遺物を伴っていた。石流遺跡は古墳時代後期の遺跡といえるが、短期間の間に生活域を西側の低地から、東方の丘陵中腹に移していったことが窺われた。

また、2区ではピット群の内の1つから江戸時代初頭の天目茶碗が出土したほか、祭祀遺物と考えられる合わせ口の土師質土器の皿も出土した。江戸時代以降の遺物は3点のみであったが、江戸時代初期にも、ここは人々の活動の舞台となっていたようである。

遺物 観 察 表

挿図 番号	種別	器種	法量 (cm)	胎土	焼成	色調	調整等	残存状況	備考
11-1	須恵器	蓋		石英・長石微粒を少々含む	良好	外面：灰色 内面：灰色 断面：灰色	外面：天井部へら切り後無調整 へら記号「X」あり～回転ナデ 内面：回転ナデ	口縁を全周欠損する	
11-2	須恵器	蓋	口径：9.8 器高：3.4	石英・長石微粒を若干含む	やや軟	外面：淡赤褐色～灰色 内面：灰色 断面：淡赤褐色	外面：天井部へら記号「X」あり へら切り後軽く回転ナデ 内面：回転ナデ	約2/5周程度残存	ろくろ：右回転
11-3	須恵器	蓋	かえり部径：7.5 口径：9.8	石英・長石微粒を少々含む	良好	外面：灰色 内面：灰色 断面：灰色	外面：天井部つまみ 回転へラケズリ後軽く回転ナデ 内面：回転ナデ	ところどころ欠損するが完形に近い。	ろくろ：右回転
11-4	須恵器	坏	口径：9.2 (推) 底径：7.2 (推) 器高：3.0	石英・長石微粒を若干含む	良好	外面：灰色 内面：灰色 断面：灰色	外面：回転ナデ～回転へら へスリ後軽く回転ナデ 内面：回転ナデ	約1/2周弱残存	ろくろ：右回転
11-5	須恵器	高坏 (坏部のみ)	口径：16.0 (推)	石英・長石微粒を少々含む	良好	外面：灰～黒灰色 内面：灰色 断面：灰色	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	坏部のみ約1/3程度残存	ろくろ：右回転
11-6	須恵器	高坏	口径：15.15 頸径：4.1 底径：9.4 器高：10.9	石英・長石微粒を多量に含む	良好	外面：灰～黒灰色 内面：灰色 断面：灰色	外面：回転ナデ 方形透かし 二ヶ所有り 内面：回転ナデ	口縁と底の端部を若干欠損するがほぼ完形	ろくろ：右回転
11-7	須恵器	脚部 (高坏)	底径：9.8 (推)	石英・長石微粒をわずかに含む	やや軟	外面：淡灰色 内面：淡灰色 断面：淡灰色	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	約1/6周程度残存	
11-8	須恵器	脚 (器種不明)	底径：9.2	石英・長石微粒をわずかに含む	良好	外面：灰色 内面：灰色 断面：灰色	外面：回転ナデ ナデ沈線有り 内面：回転ナデ	脚部のみ約1/6周程度残存	
11-9	須恵器	脚 (器種不明)	底径：13.4 (推)	石英・長石微粒を多く含む	良好	外面：灰色 内面：灰色 断面：灰～紫灰色	外面：回転ナデ 異形透かし有り 内面：回転ナデ	脚部のみ約1/7周残存	
11-10	土師器	甕		微粒～1mm前後の石英粒を多く含む	良好	外面：淡橙褐色 内面：淡橙褐色 断面：淡橙褐色	外面：ヨコナデ タテハケ 内面：ヨコナデ ケズリ	口縁のみ約6cm残存	
11-11	弥生土器	壺		石英・長石微粒を多く含む	悪い	外面：明褐色 内面：明褐色 断面：黒色	外面：擬凹線 タテハケ 内面：風化	4×4cm程度残存	
18-1	須恵器	蓋	口径：8.4 (推)	石英・長石微粒を多く含む	良好	外面：淡灰色 内面：淡灰色 断面：淡灰色	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	約1/3程度残存	ろくろ：右回転
18-2	須恵器	蓋	口径：10.3 かえり径：8.0 器高：2.7	石英・長石微粒を若干含む	良好	外面：淡灰色 内面：淡灰色 断面：淡灰色	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	口縁端部を一部欠損するがほぼ完形	ろくろ：右回転
18-3	須恵器	蓋	口径：9.85 かえり径：7.4	石英・長石微粒を多く含む	良好	外面：灰色 内面：灰色 断面：灰色	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	口縁端部約半周とつまみを欠損	ろくろ：右回転
18-4	須恵器	蓋	口径：7.5 最大径：9.6	石英・長石微粒を少々含む	良好	外面：灰色 内面：灰色 断面：灰色	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	約1/2周弱残存	ろくろ：右回転
18-5	須恵器	高坏 (坏部)		石英・長石微粒を少々含む	良好	外面：濃灰色 内面：灰色 断面：灰色	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	口縁端部が3cm弱残存	ろくろ：右回転
18-6	土師質土器		底径：6.2	緻密	悪い	外面：淡赤褐色 内面：淡赤褐色 断面：淡赤褐色	外面：回転ナデ 糸切り 内面：回転ナデ	底部のみ1/2残存	
18-7	土師質土器	坏	底径：5.8	緻密	悪い	外面：白褐色 内面：白褐色 断面：白褐色	外面：風化 底部回転糸切り 内面：風化	底部付近が1/2周残存	
20-1	須恵器	蓋	口径：10.0 (推) 底径：6.0 (推) 器高：3.9	石英・長石微粒を密に含む	良好	外面：淡灰色 内面：灰色 断面：灰色	外面：回転ナデ へら切り 内面：回転ナデ	約半分残存	ろくろ：右回転
22-1	土師質土器	皿	口径：9.0 底径：4.8 器高：1.7	長石微粒をわずかに含む	良好	外面：淡橙褐色 内面：淡橙褐色 断面：淡橙褐色	外面：回転ナデ 底部糸切り 内面：回転ナデ	完形が出土したが、一部取り上げ不能で欠損	ろくろ：右回転
22-2	土師質土器	皿	口径：9.45 底径：5.1 器高：1.85	長石微粒をわずかに含むが緻密	良好	外面：淡明橙褐色 内面：淡明橙褐色 断面：淡明橙褐色	外面：回転ナデ 底部回転糸切り 内面：回転ナデ	完形していたが、一部取り上げ不能で口縁端部を中心に欠損	ろくろ：右回転
30-1	須恵器	坏		石英・長石微粒を若干含む	良好	外面：灰色 内面：灰色 断面：灰色	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	口縁部が3cm強残存	
30-2	須恵器	坏	口径：10.7 (推) 受部径：13.2 (推)	石英・長石微粒を少々含む	良好	外面：灰色 内面：灰色 断面：褐色	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	口縁部のみ約1/4周弱・接合周一固体不可の口縁部が別に1/6周残存	ろくろ：右回転
30-3	土師器	把手 (甌か)		1mm弱の石英・長石粒を少々含む	やや軟	外面：明橙褐色 内面：明橙褐色 断面：明橙褐色	手捏ね風化が著しい	把手部分のみ	
30-4	陶器	天目茶碗	口径：12.2 (推) 底径：4.4 器高：6.4	ボンボンしている・微砂粒を含む	良好	鉄軸は暗褐色に発色 露胎部は白褐色	外面：底部以外は鉄軸かかるが、一部露胎有り 内面：鉄軸かかるが、露胎有り	約半周強残存	ろくろ：右回転 (瀬戸・美濃系)
33-1	須恵器	蓋	口径：12.4 器高：4.75	微粒～1.5mm程度の石英・長石微粒を少々含む	軟	外面：淡灰色～淡褐色 内面：橙色 断面：橙色	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	口縁端部を少々欠損するがほぼ完形	ろくろ：右回転

※ (推) とは復元推定値を示す

押図 番号	種別	器種	法量 (cm)	胎土	焼成	色調	調整等	残存状況	備考
35-1	須恵器	蓋	口径: 14.2 (推)	長石微粒をわずかに含む	悪い	外面: 淡白灰色 内面: 淡灰色 断面: 淡灰色	外面: 回転ナデ 内面: 回転ナデ	約1/4周強残存	ろくろ: 右回転
38-1	須恵器	蓋	口径: 12.4 (推)	石英・長石の微粒を少々含む	良好	外面: 淡灰色 内面: 灰色 断面: 淡黒色	外面: 回転ナデ 内面: 回転ナデ	口縁端のみ約1/6周程度残存	ろくろ: 右回転
38-2	須恵器	蓋	口径: 13.4 (推)	石英・長石の微粒を多く含む	良好	外面: 灰~黒灰色 内面: 濃灰色 断面: 淡灰色	外面: 回転ナデ ナデ沈線有り 内面: 回転ナデ ナデ沈線有り	口縁部のみ約1/4周残存	ろくろ: 右回転
41-1	須恵器	蓋	口径: 不明 器高: 不明	石英・長石微粒を少々含む	良好 焼き歪み	外面: 灰色 内面: 灰色 断面: 灰色	外面: 回転ヘラケズリ 回転ナデ 内面: 回転ナデ	口縁部を約2/3周欠損	ろくろ: 右回転
41-2	土師器	甕	口径: 19.0 頸径: 15.0	石英・長石の微粒を多く含む	やや軟	外面: 明橙褐色 内面: 明橙褐色 断面: 明橙褐色	外面: 風化 内面: 風化	口縁部のみ約1/6周弱残存	
41-3	土師器	甕	口径: 20.2 (推) 頸径: 17.2 (推)	1mm前後の石英・長石粒を多く含む	軟	外面: 淡褐色 内面: 淡褐色 断面: 淡褐色	外面: 風化 内面: 風化	約半個体分が残っていたと思われるが接合不可。 図示部は口縁付近の10cm程度	
41-4	土師器	甕	不明	1mm強の石英・長石粒を少々含む	良	外面: 淡黒色~淡褐色 内面: 淡褐色 断面: 淡褐色	外面: 風化 内面: 風化	ふかん図のとおり 4×5cm程度残存	孔一ヶ所残存
41-5	土師器	土製支脚		大小の石英・長石粒を少々含む	軟	外面: 淡橙褐色 内面: 淡橙褐色 断面: 淡橙褐色	手捏ね	図示	
42-1	須恵器	蓋	口径: 11.6 (推)	石英・長石微粒をわずかに含む	良好 やや歪む	外面: 淡灰色 内面: 灰色 断面: 灰色	外面: 回転ナデ 内面: 回転ナデ ナデ沈線有り	口縁部のみ約1/7周残存	ろくろ: 右回転
42-2	須恵器	蓋	口径: 10.6 (推) 最大径: 11.0 (推) 器高: 4.1	石英・長石微粒を若干含む	やや軟	外面: 淡灰色 内面: 淡灰色 断面: 淡灰色	外面: ヘラケズリ後軽くナデ~ 回転ナデ 内面: 回転ナデ ヘラ記号「X」	口縁部を約3/4周欠損	
42-3	須恵器	蓋	口径: 9.8 (推) 器高: 3.7	石英・長石微粒を少々含む	良好	外面: 濃灰色 内面: 濃灰色 断面: 濃灰色	外面: ヘラケズリ後軽くナデ~ 回転ナデ 内面: 回転ナデ	約1/3程度残存	ろくろ: 右回転
42-4	須恵器	宝珠つまみ	つまみ最大径: 2.1	石英・長石微粒を少々含む	良好	外面: 灰色 内面: 灰色 断面: 灰色	回転ナデ	つまみのみ	
42-5	須恵器	環	口径: 10.2 (推) 受部径: 13.0 (推) 器高: 3.5	1mm弱の長石・石英粒を多く含む	良好	外面: 灰色 内面: 赤褐色 断面: 赤褐色	外面: 回転ナデ~回転ヘラケズリ 内面: 回転ナデ	約1/4周程度残存	ろくろ: 右回転
42-6	須恵器	環	口径: 9.4 (推) 受部径: 12.1 (推)	石英・長石微粒を若干含む	やや軟 焼き歪みあり	外面: 灰色 内面: 灰色 断面: 灰色	外面: 回転ナデ 回転ヘラケズリ 内面: 回転ナデ	図示部が1/4周強残存	ろくろ: 右回転
42-7	須恵器	環	口径: 9.8 (推) 受部径: 12.2 (推)	石英・長石微粒を多く含む	良好	外面: 灰色 内面: 灰色 断面: 灰色	外面: 回転ナデ~回転ヘラケズリ 内面: 回転ナデ	口縁~受部付近が約1/6周残存	ろくろ: 右回転
42-8	須恵器	環	口径: 9.7 (推) 受部径: 12.4 (推)	石英・長石微粒を少々含む	良好	外面: 灰色 内面: 灰色 断面: 濃灰褐色	外面: 回転ナデ 内面: 回転ナデ	図示部が5cm程度残存	ろくろ: 右回転
42-9	須恵器	環	口径: 9.6 (推) 受部径: 12.3 (推)	石英・長石微粒を若干含む	良好	外面: 灰色 内面: 灰色 断面: 灰色	外面: 回転ナデ 内面: 回転ナデ	口縁部のみ5cm程度残存	
42-10	須恵器	環	口径: 9.2 (推) 底径: 6.0 (推) 器高: 3.05	石英・長石微粒をわずかに含む	良好	外面: 灰色 内面: 灰色 断面: 灰色	外面: 回転ナデ~回転ヘラケリ 内面: 回転ナデ	約1/4周弱残存	ろくろ: 右回転
42-11	須恵器	高台付環	底径: 6.9 (推)	石英・長石微粒を少々含む	良好	外面: 灰色 内面: 灰色 断面: 灰色	外面: 回転ナデ 回転糸切り 内面: 回転ナデ	底部のみ約1/6周残存	ろくろ: 右回転
42-12	須恵器	環		石英・長石微粒を少々含む	やや軟	外面: 濃灰色 内面: 濃灰色 断面: 濃灰色	外面: 回転ナデ 糸切り 内面: 回転ナデ	底部2cm強残存	
42-13	須恵器	はそう	頸径: 2.9 (推) 胴部最大径: 7.2 (推)	石英・長石微粒を少々含む	良好	外面: 灰色 内面: 灰色 断面: 灰色	外面: 回転ナデ 沈線有り 内面: 回転ナデ	胴部上半が約1/5周残存 孔の部分は残存しない	ろくろ: 右回転
42-14	土師器	甕	口径: 18.8 (推) 頸径: 15.6 (推)	1mm弱の長石・石英粒を多く含む	悪い	外面: 淡褐色 内面: 淡褐色 断面: 淡褐色	外面: 風化 内面: 風化	口縁~肩部が約1/5周残存	
45-1	土師器	高環	口径: 17.9	石英・長石の微粒を少々含む	不明	外面: 淡褐色 内面: 淡褐色 断面: 淡褐色	外面: 風化 内面: 風化	環部のみ残存	二次的に火を受けている 外内面とも赤色顔料の痕跡有り
45-2	土師器	甕	口径: 17.8 (推) 頸径: 15.0 (推) 胴部最大径: 23.2 (推)	石英・長石の微粒を少々含む	悪い	外面: 淡褐色 内面: 淡褐色 断面: 淡褐色	外面: 風化 内面: 風化	多くの破片が出たが、 接合できたのは口縁~胴部の 約1/4周弱	
46-1	土師器	甕	口径: 14.6 (推) 頸径: 10.6 (推)	石英・長石の微粒を密に含む	悪い	外面: 黒褐色~淡褐色 内面: 黒褐色~淡褐色 断面: 黒褐色~淡褐色	外面: 器面剥離 一部癩凹線 痕跡有り 内面: 風化	口縁部のみ約1/5周程度残存	
46-2	土師器	甕	口径: 18.0 (推) 頸径: 14.0 (推)	1mm前後の石英粒を多く含む	悪い	外面: 淡褐色 内面: 淡灰色~淡褐色 断面: 淡灰色~淡褐色	外面: 風化 内面: 風化	口縁周辺のみ約1/8周残存	

※ (推) とは復元推定値を示す

図 版



作業風景



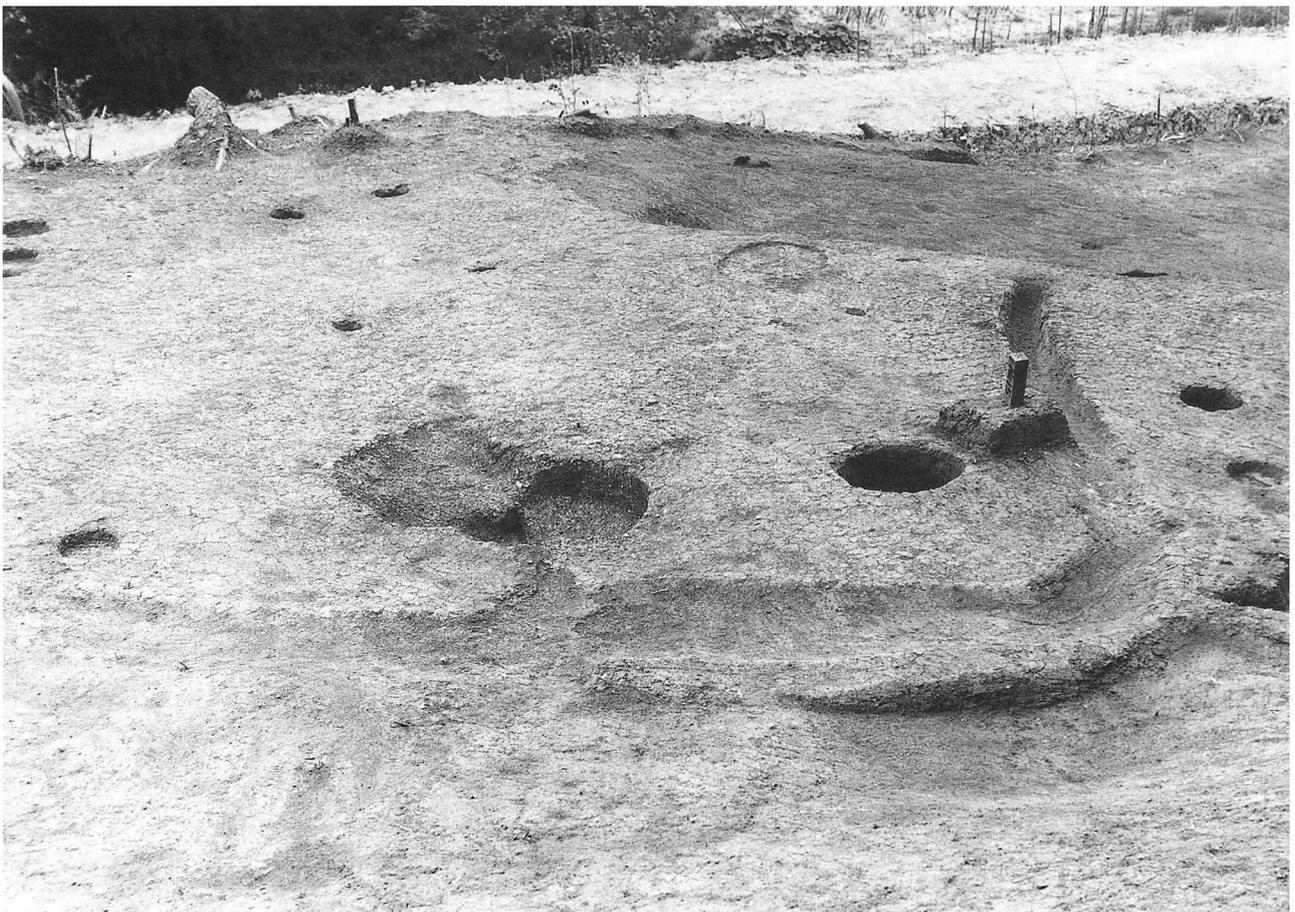
石流遺跡調査前遠景（西から）



石流遺跡調査前近景（南西から）



1 区南東端平坦面遺構（部分）



SD01検出状況



1 区南東端平坦面遺構



高坏出土状況



地すべり層Ⅱ検出状況



SD03と周辺の遺構



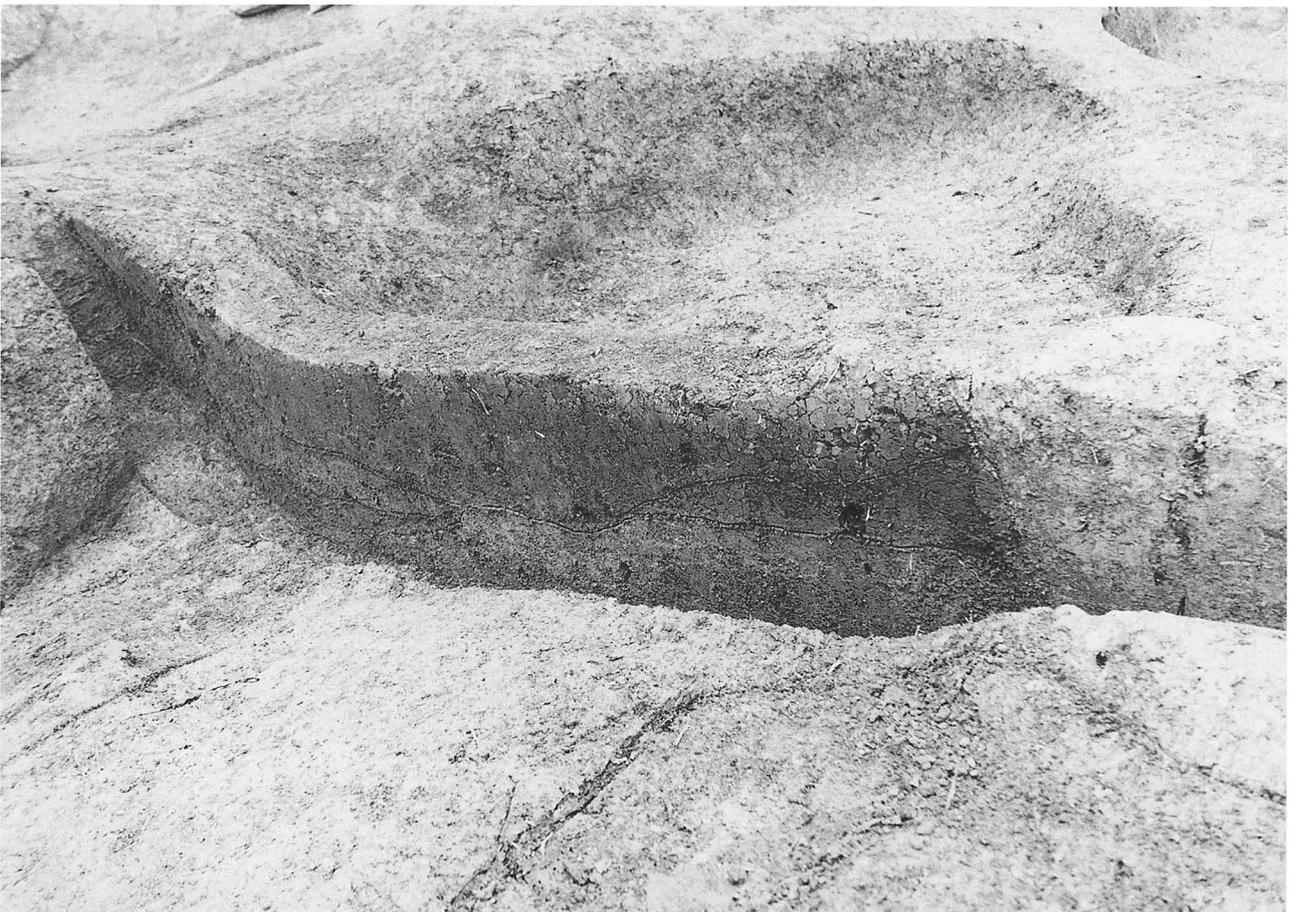
SX02遺物出土状況



SX02の須恵器出土状況



SX02・SX03完掘状況



SX02南北セクション



SX02と地すべりⅡの関係



SX02と地すべりⅡの関係



地すべり層下の遺構面



天目茶碗出土状況



2区ピット群（西から）



2区ピット群（東から）



加工段01遺物出土状況



加工段01と周辺の遺構完掘状況



SD05・06と周辺の遺構



SK05遺物出土状況



3区北西端の遺構



合わせ口の土師質土器（皿）出土状況



南壁セクション



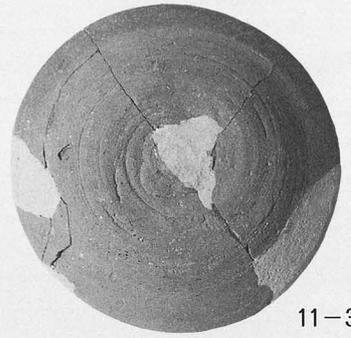
石流遺跡完掘状況（南西から）



11-1



11-2



11-3



11-4



11-5



11-6



11-7



11-8



11-9



11-10



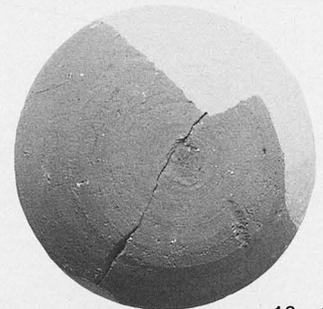
11-11



18-1



18-2



18-3



18-4



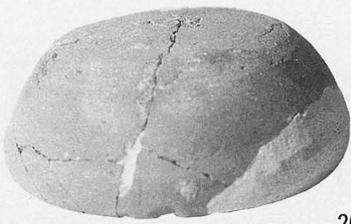
18-5



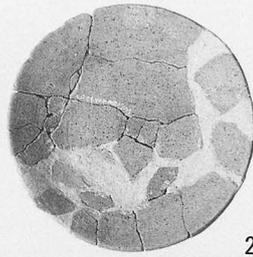
18-6



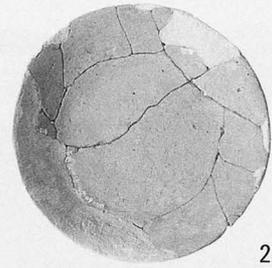
18-7



20



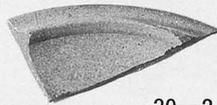
22-1



22-2



30-1



30-2



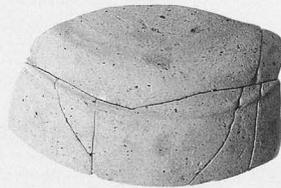
30-3



30-4



33



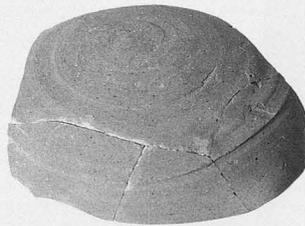
35



38-1



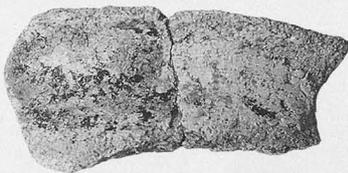
38-2



41-1



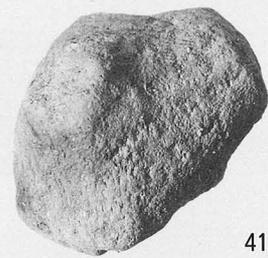
41-2



41-3



41-4



41-5



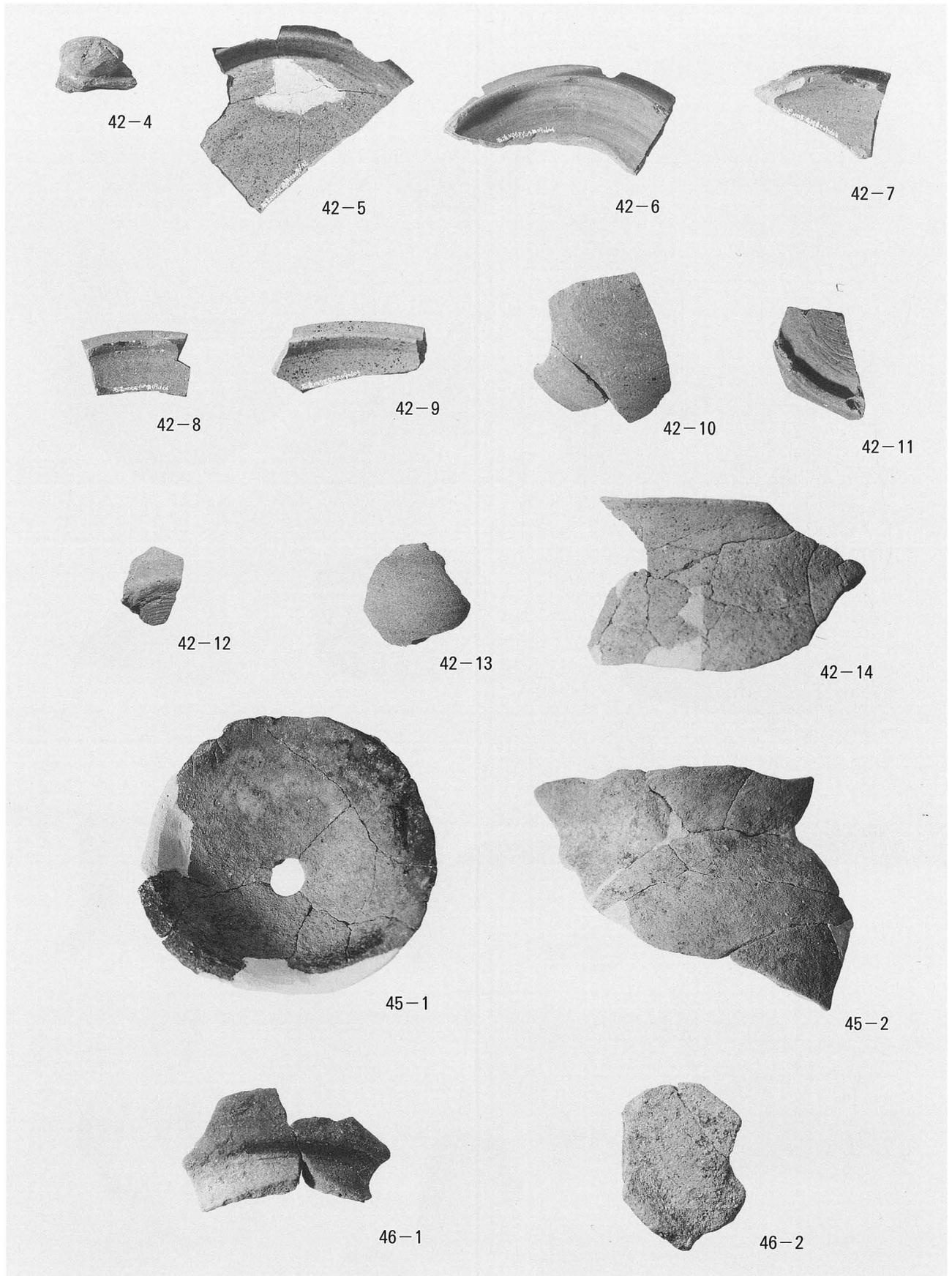
42-1



42-2



42-3



42-4

42-5

42-6

42-7

42-8

42-9

42-10

42-11

42-12

42-13

42-14

45-1

45-2

46-1

46-2



鉄滓



鉄滓



鉄滓

報 告 書 抄 録

ふりがな	ひいかわすいどうけんせつじぎょう8こうく じゅすいちそうすいかんろふせつこうじにともなういしながれいせきはくつちょうさほうこくしょ							
書名	斐伊川水道建設事業8工区受水地送水管路布設工事に伴う石流遺跡発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	松江市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第131集							
編著者名	江川幸子・福光龍治							
編集機関	松江市教育委員会 財団法人松江市教育文化振興事業団							
所在地	〒690-8540 島根県松江市末次町86 TEL: 0852-55-5284 〒690-0401 島根県松江市島根町加賀1263-1 TEL: 0852-85-9210							
発行年月日	平成22年2月26日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いしながれいせき 石流遺跡	しまねけん 島根県 まつえし 松江市 ほつきちやう 法吉町 371-6 372-3 898-2	32201	D-1080	35° 29' 25"	133° 3' 13"	平成21年 4月10日) 平成21年 6月24日	470㎡	上水道 整備
所収遺跡名	種別	時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
石流遺跡	集落跡	古墳時代 近世		ピット 土坑 加工段		土師器 須恵器 土師質土器 陶磁器		

松江市文化財調査報告書

平成22年 2月26日

発行 財団法人松江市教育文化振興事業団
島根県松江市西津田6-5-44

印刷 有限会社 松陽印刷所
島根県松江市学園南2-3-11